
疑殆帯同

穂田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑殆帯同

【Nコード】

N5564K

【作者名】

穂田

【あらすじ】

少女と男の歯車はいつでも噛み合わない。男は少女に執着し、少女は男を憎悪する。主は少女で振り回される男は無機質のよう——人間のくせに人間らしくない少女と男の殺人記。生き残るのはいつも、少女だった。

〈旧〉序章／第四章

《序章》（前書き）

縦書き推奨。

《序章》（本文）

「夢を見るだけなら簡単なの。そんで夢を思いつくまでが長くて苦しかったら、実現するのはほぼ不可能に近いと目紘は思うのね」

だつて疲れちゃうもんと目紘^{まみだ}は言った。

目紘^{かがみ}鏡。ポニーテールがキリリと似合う小学二年生だ。細い手足というよりも俺に言わせりや栄養失調の蜘蛛のような四肢をこれまた爪楊枝みたいに細い身体にかろうじてくつつけている。見た目とは正反対におとぼけた彼女は今日ものんびりとした口調でよくわからないことを言った。おそらくは頭が良くて真っ当かあるいは正論を言っているのだろうけれど、脳みそがシャッフルされた後の俺には大して理解ができるはずもなかった。できたのは馬鹿みたいに口を開けていることだけだ。

目紘は身の丈よりも倍は大きい椅子に（いわゆる社長椅子とやらに）深く腰を落ち着かせ、抵抗すら最初から放棄している俺を爬虫類のような無表情な目で眺めていた。吐き気がするような薬品の匂いに酔いながら頭の中まで凌辱されたような気分で行寺は冷たい鉄の床に仰向けで寝転がっている。望んで寝ているわけではない。耳からはピンクの半固体状の物体が流れ出していて、およそ小学生の理科教材としてはけしからんと思われるが目紘はまったく頓着しなかった。あぐらをかいていた椅子から「どっこいしょ」と年寄りくせえ掛け声と共に降りると、すぐ足元にいた俺の頭を踏みつけた。

軽いからといって侮ってはいけなかった。カラッポの脳にはちよつとばかりの振動さえ響いて反響する。目紘が不気味に「うふふ」と笑った。

「普段の貴方ならその体勢で私のスカートの中も見えたのにね。残念」

俺は何か言い返したらしかった。目紘はまた笑う。

「両目がそろって陥没するなんて楽しいでしょう？ それから頭蓋骨が開くなんて特技、私は思いつきもなかった。行寺ゆきじってユーモアのセンスがあるみたい。いつそ芸人になってみたらいいと思うの。貴方が売れるために少しだけならお手伝いする」

目紘が少し手伝ったら俺は大統領にだってなれるだろう。遠慮する、とがらんだ目の目で答えた。あら残念乗り気だったのに、と子供みたいに目紘が言う。そして相変わらず小さな靴の裏とディープキス真つ最中の俺の口がその間に早くも限界を迎えた。それでも我慢したんだ。だけど顎を外されて爪先を喉の奥まで突っ込まれたら噎むせるのは人の悲しい性だとも言える。そのためにあっさりと小学生が逆ギレのしてしまうは自由な校風をスローガンに掲げた校長のせいなのである。ぜひとも頭と目と顎が元に戻ったら辞職したい。たとえ戻ってなくとも辞めたい。この女がいない世界ならどこだっていい——俺ハ、人間ダ。

「……ヴ……」

腹の中心が疼く。目紘が踵を落としたのだ。死ねクソヤロウと言おうにも声帯が潰されていた。さっき声が出たのはほら、あれだ。蛙が踏み潰されて空気が口から抜けるときの音みたいな。

「中身がなくても痛みは脳に伝達されるのかしら……」

たったそれだけを確かめるためにヤツは怒りに任せて俺の十二指腸をピンポイントで踏み潰したのだった。死ねクソガキ。脳みそが耳から天辺からと出てしまっているので頭からの指令はほとんど皆無と言っていいほどだ。行寺がかりうじてできたのは目で語ることだけだった。

「苦しさは伝達されるのに痛みは違うなんてつくづく面白いのね」
それは面白いと思ってるやつ声じゃない。面白いならまず笑え。
「困るわ」

困ってるのはこっちだ。

「ねえ、駒緒こまお」

遂には下の名前で呼び捨てしやがった。

「貴方の名前ってバランスが悪いと思う。行寺駒緒。同姓同名がいたとしてもそれはそれで素晴らしい名前だと私は絶賛できるのだけれど、貴方が行寺駒緒って名前であることがひどく腹立たしくて堪らないの。どうしてかしら。ああ……そうね。きつとアレなのよ。
——見ただけで憎悪がこみ上げる。名前を聞くと発狂しそうになる。本人が目の前にいたら無力な蟻のようにプチッと殺してしまいたくなる。——そういう類いの人間なのね、私にとって。つまり生理的に受けつけないのよ」

もったいぶらずに最初からそう言え。まどろっこしいやつめ。

目紘が両足を俺の上から退けた。

例の眼が俺を見下している。俺は半笑いで見上げた。ヤツの目が猫のように細くなる。

「幸運ってこういうことを言うのでしょうね。貴方はついてる」
憑いてる？

「私の実験台第1号就任、おめでとう」

目紘は俺の顎に両手を添えて無邪気な子供のようになっこりとした。

「これで貴方は私の手足となりました」

俺が足だったり腕だったりしたら気持ち悪いだろうよ。

「元から貴方は気持ち悪いわ」

あらま。

「顔も身体も髪もその存在自体、視界に入れたくない。でも貴方の才能は買ってるの。貴方ほどのビクリドッキリ人間はそうそういないもの」

それを言うなら才能も買った、だろ。

行寺の口座には既に零が4つつく札が千、振り込まれている。現実には逃げようなんて夢のまた夢なのだ。

「まずは目を元の位置に戻して次に脳を詰めるから。顎と声帯は最後でいいよね。駒緒ってお喋りが鬱陶しいのよ。いつそのことずっと声が出ないようになっておいてやろうかしら」

鬼の所業だ……。涙目で訴えようとしたが、今までの人生で1度も涙腺を使ったことがないので無理だった。なんで親は涙の出し方を教えてくれなかったんだろう。息子がこういう事態に陥ることを想像しなかったのだろうか。

俺が散らばった脳でうつらうつらと考える間にも目紘は右の目ん玉を指を眼窩に突っ込んで引きずり出した。次は左。グチゅ、という音は背筋を蛆虫が這い上がるような感覚を思わせた。切れた目の端になにやら怪しげな抹茶色の薬をすり込まれる。入れ物を見たらわりとメジャーなインスタントコーヒーの瓶だった。まさかコーヒー豆を塗られているということはないだろう。そうでないことを願う。

「爪を食い込ませー、あーあなたの欲を味わうー」

……俺の脳を塵取り2つを駆使して集めながら、ヤツはセクシャルな歌を歌い始めやがった。小学生のくせに。

「ああー、あなたを感じてーいたい。づんちゃか、らららん、らんぶりっ子なわたしを愛して」

おそらく、いや確実に子供に歌わせてはいけない歌だ。演歌のようなこぶしの利かせ方だが歌詞に『ぶりっ子』なんて使うのだろうか。どんな歌を歌おうと個人の自由だからとやかく言うのもおこがましいことだろうが、それにしたって『あなたの欲を味わう』は駄目だろう。せめてあと5年は待つべきだ。個人的にはあと三十年がグッジョブ。収穫時だ。

「……………」

「……………」

手が止まった目紘と見つめ合ってしまった。軽蔑するような視線なのはなぜだろう——無意識のうちに墓穴を掘ってしまったのだらう。

「薄汚れた大人はこれだから嫌です。かの光源氏もまだ幼い紫の上を性的感情を持ちながら養育し、わずか十二ほどの年齢であった彼女と契りを結び、その理由は義母の藤壺に似ていたからといういかにも自己本位なもの。大人とはなんと浅はかな生き物なのでしょう。その欲の深さといったらまるで飢えた熊のよう」

熊かよ。日本の三大随筆を馬鹿にするな。光源氏は天下一のイケメンボーイだ。

「でもいくら大人を嫌うからといってピーターパン・シンドロームにかかっている暇など私にはないの。モラトリアムも不必要です」

顎がようやく填められた。ミシミシと聞こえるのはもしや砕ける音なんじゃないかと一瞬疑ってしまった。改めて声を出してみる。

「あー」

ヘリウム吸った後みたいな声が出た。『なんじゃこりゃ』で『おまえはもう死んでいる』に続く『あじゃぱー』だ馬鹿野郎。目紘が俺を蟻ん子でも見るような顔をしていた。やべっ、踏み殺されるっ。「相当混乱しているみたいね」

哀れみの表情だった。一足す一が二でも三でもなく一と答えられない人間に対する面だ。一足す一は、とある状況下では答えが二にはならない。液体や半固体状の一と一を混ぜたら分離する同士の物質でない限りは一つに混じり合う。だから一足す一は一——が真だとしたら、俺は算数なんて嫌いになってやる。算数の定義が崩れるなら数学もくそもない。大学まで卒業した文系一直線の人間からしたら根本からやり直すほど、たかが数の羅列に時間を割くミリットがない。ミリットをとうに超えた次元の話だ。そしてこのミリットもミリットも視界に入らず、ミリットクラシー実力主義に基づいて這い上がってきた俺の全てをぶち壊しにかかったっ——生意気なこのガキンチョは、鏡の名に相応しく俺の表面を浚い、更には内面に隠したことでさえ

も見通した鏡だった。

目紘がまたあの不気味な笑顔を浮かべる。同じ人間のくせに目紘はまるで人間に見えなかった。

「じゃあ言い直すね。私の手下になってくれて吐き気がするほど嬉しいわ。これからもよろしくね、先生」

「よ、う、む、い、ん、だ」

……おお？　ヘリウムめ……意外にハマるじゃねえか。

「でももうここにはいられないわね。だってみんな死んじやってるんだもん。別の隠れ蓑を見つけないとまた捕まっちゃうわ」

「……」

行寺は目紘を見上げた。らしくない表情をしていた。

「実家？」

「そう。警察ならまだよかったのにねえ」

目紘は笑う。行寺は目を伏せた。

「行くぞ」

絞り出すような声を出してしまった。目紘はそういうことに敏感だ。しかしすぐに目くじらを立てるほど子供らしい子供でもなかった。むしろ大人を手玉に取って遊ぶ破天荒なガキンチョだ。だが――立ち上がるために手を差し出した彼女は、まったくもって性格とは正反対の、笑顔が似合う小さな女の子だった。守ってやらなきゃと――思わないではなかった。

「四面楚歌だったら上から下から逃げればいいってことよ。それか、楚歌じゃなくて讚美歌にすればいいだけの話」

簡単だわ――背中を見せた彼女は、ニヒルにそう言った。

「私に不可能はあるけど、貴方がいるなら私に不可能は皆無よ」

「俺の特技なんて死なないことくらいだぞ」

「それが貴方の価値でしょ。たった一つの特技なんだから大切にしなきゃ駄目です」

「大切にしたら死ねねえじゃねーか」

「それが私が貴方を選んだ理由よ」

貴方は命に執着している——目紘は言った。

そんなこともなくはない。自殺しないだけマシだと、最近はあるたりする。だって自殺は痛いし他人に迷惑だし、それなのに死ねないし——無意味かなあなんて学習してみた。たまに首吊って瞑想してみたりするけど——迷走してる名僧が瞑想——ふざけてみたりして。

本心は、ただめんどくさいだけ。殺されそうになったら死んでやる。

「行くわよ」

「む」

小さな背中についていく。コンパスを合わせて、まるで金魚の糞みたいな自分。

ふと思う。彼女はいったいぜんたい何故生きているのだろうか。つまらなそうな顔をしているくせにやけに元気で楽しそう。排他的なのになぜか年相応に寂しがり屋。温もりを欲しがっている。

そんなこいつが、俺は好きなのかもしれない。

「目紘」

「ん？」

「なんで俺を殺したんだ？」

「……ふふ」

目紘は——笑った。

《序章》（後書き）

こんにちは。

お久しぶりです。穂田です。

はじめに謝らなければいけないのは、また嘘をついたことです。他の作品の完成は程遠いようです。ごめんなさい。

『疑殆帯同』、初めてのホラーっぽいファンタジーです。三十分ほどで書いたのでクオリティーはどこまでも低いです。春休み中に完成するといいいのですが……穂田は物語を完結まで持っていけない未

熟者のようです。

受験生のくせにチョコばかり齧っている穂田でございますが、いろいろと頑張ります。
では。

《第一章》（本文）

——どれだけの愛があれば夢を見られるのかな。

杏奈は言った。

愛って何だと訊けば、人それぞれだと言われた。

——でもほしい。

——俺はいらない。

——好きかも。

——そういうのが苦手かも。

杏奈が笑う。

——駒緒は嘘つきさんなんだね。

正直者よりはマシだと、思ったりした。バカみたいに正直なコイツにだけはなりたくない、思ったりした。

杏奈は世界にとって唯一無二で、俺は世界にとってゴミだった。

ゴミは溢れてる。だからゴミのままがいい。ゴミ以下はないけどゴミ以上にもなりたくない。

価値をつけられるくらいならいっそ、死んだほうが楽だ。

——ねえコマ。

——略すな。

——すごく好きかも。

——そういうの苦手だ。

——……ふーん。そうなの。

嘘だった。あまりに純真すぎる杏奈がどこまでも好きだった。

映像は反転する。

——だからさ、どうせだったらもっとはやく決めるべきだったね。
杏奈は少しだけ大人びた杏奈になっていた。

——……なにを？

杏奈の顔が遠退く。淡くて薄くて見えなくなりそうになった。
手を伸ばしても届かない。心臓を逆撫でされるような気持ち悪さが這いずる。

とてつもなく嫌な予感がした。

——結婚式をね、はやくするべきだったよ。
杏奈は困ったように微笑んだ。

——そうすれば私、生きたいって思ったもん。

景色は、暗転する。

よく笑う。よく食う。よく寝る。それが子どもってものだと思ってた。だが、真っ只中に入ってみると現実は違った。無表情と目の下の隈はまるで洗脳された人間兵器のように見えた。自分に関係のあることには専ら興味を示さないが、自分の周りの人間のことに敏感に察知する。

——人の不幸は蜜の味。

そのへんは誰でも変わらない。隣のやつが自分より格下なら嬉しくて、少しでも抜け駆けされるとムツとする。

「駒緒、ガムテープ貸してよ」

親は全部を兼ね備えてるなんてことはなくて、とどのつまり同じ人間だとはつきり理解するのはいつだろうか。俺は十五のときだった。

大きすぎる挫折をして、若気の至りとやらに恥と恥を重ねて積み重ねた先でようやく最近まとまり始めた。

「コマコマコマコマコマコマコマコマコマコマコマコマコマコマコマ」

親は万能じゃない。数学からわからない父親を見てようやく思い知った。こいつぁ、人間だったと。

「駒緒！」

耳元で杏奈が叫んだ。眉を寄せて額を押し退ける。

至近距離で怒った顔が見えた。言い訳のように、「今な、子どもらしい子どもつつーのは何だろうなって考えててさ、……どう思う？」と問いかけたが、杏奈はさらに機嫌を損ねただけだった。筒みたく丸めた台本でこめかみを軽く殴られる。

「ふざけてないで作業しなよ。衣装がないの今んとこ駒緒だけなんだからね」

俺？ と首をかしげる。見渡すとダンボールの切れ端にガムテープくっ付けて何だかつくっているらしい総勢二十人がこっちを見ていた。照れるなあおい、と笑ったら睨まれた。

ガムテープの輪っかに腕を通してグルグルと遊んでいた手を止める。杏奈は顔を真っ赤にしていた。

怒ってるんだか照れてるんだか知らないが、林檎みたいで愉快すぎるコントラストだ。からかってやろうかと思ったが雰囲気的に自重した。

下手したら現在十七年と三ヶ月動いてくれている心臓君が止められてしまうかもしれない。それは可哀想だ。あと四日は動いてもらわねばならない。金曜発売の漫画が買えなくなるじゃないか。

「エプロン以外に何かあんの？」

床に座ったままで杏奈を見上げた。杏奈は手を差し出す。おとなしくガムテープを渡した。杏奈はそれをダンボールをいじる大道具班に投げる。

ただしその足は微動だにしない。

まさかとは思ったが、杏奈はそのまま立ち去るなんて甘っこい人間じゃなかった。

「あんた、エプロン自体ないじゃん」

「な、なに？ そりゃ大変だ。急いでカラオケに行こう」

「意味わかんないし」

冷たく返された。ただ単に杏奈と出かけたかっただけなのだが俺の熱烈なるラブコールはラヴコールに昇天する前に叩き落とされた。漢心がわからん鈍子め。

「今日からおまえは鈍田鈍子だ」

「黙れ大根。次真面目にやらなかったら役下ろすからね」

「ぷっぷくぷー」

「消えろ」

ひどいことを平然と言う女だった。かわいい顔したベビーフェイスのくせに口が悪い。罵詈雑言の嵐にボクの心は崩壊寸前だ。どうか杏奈の小枝のように細い手足が暴力までふるうようになりませんように。

言いたいことを言った彼女はブレザーを翻し、スカートをひらりと舞わせて颯爽と小道具班のほうへと行ってしまった。その腕を掴んで「行くな！」とダンディボイスで囁いてメロドラする勇氣も必要性も感じなかったので、仕方なくもおとなしく、言われたとおりにミシンに向き直った。

「……………」

ただしこれがまた難題だ。なにせ、かたやミシンは机の上。かたや俺は地べたにあぐら。当然のごとく手元がまったく見えない。椅子を使えと宣うクラスメイトもいたが、残念ながら手の届く場所に椅子がない。空気椅子でミシンを扱うのも過酷すぎる。すぐに足がプルプルだ。

「足プル足プル」

「そんなことばかりしてるから完成しないんでしょ！」

退いてと押し退けられた。杏奈は椅子を引き寄せてガタガタと縫

っていく。

……。

「苦しくったってー悲しくったってーコートのかなー」

「できた。糸処理してミシンを家庭科室に戻しといて」

「むむ」

「ちゃっちゃと行ってきて。戻ってきたら劇の練習だから」

「あと二週間もあるのになー」

「『も思考』は『しか思考』には勝てない」

出来上がったピンクのエプロンを、ぺいと投げられた。

「あと二週間しかないんだからダラダラしてないで真面目にやって」

「むー」

「むーじゃない」

ボビンから伸びた糸の余りをぐるぐる巻き取って針をしまって覆いのような蓋をする。

無造作に持ち上げると「下持って!」と怒られた。

「……。杏奈あ」

教室を出る直前で首だけを後ろに回す。杏奈はガムテープをちぎっていてこっちを見ない。

「なにさ」

「あのさあ、デートしようぜ」

「うっさいバカ」

顔を真っ赤にする杏奈を見るのがやっぱり何より、好きだった。

きひひと笑うと、ガムテープが飛んできた。

《第二章》（本文）

教室ってもんは窮屈だ。どうにも好きになれない。

教室が嫌いなのではない。教室に生徒が飽和状態なのが苛々するのだ。

クラスにいるのは最高三人でいい。なんならマンツーマンでも構わない。

もっと言えば教室内で一人でも構わない。
ぜひ一人にしてくれ。この悔しさを一人で噛みしめさせてくれ。
朝のホームルームが終わった教室を見渡す。先生はさっさと帰った。

楽しそうなクラスメイトたちが憎らしい。

「む……」

実は――ラブレターを書いてみた。

「俺は今、ラブレターを書いてみた」

うむ、と頷いて前の席に座る杏奈の背中を眺める。

「でも杏奈は受け取ってくれなかった」

果たし状と勘違いされた。それ以前に杏奈宛てではない。

相手を間違えた。

そもそもフロムが俺じゃなかった。

「おい」

「ん？」

鉛筆回しに奮闘していた隣の席のやつが振り向く。

やつの手からボロッとシャープペンが落ちた。

「自分で渡せ」

ラブレターを差出人に返した。

俺には荷が重すぎる。もし俺が渡して相手に俺が告ったと勘違いされたらどうするんだ。これほどめんどくさい勘違いは地球上に存在しない。

フロムのやつは困ったような顔をしていた。坊主頭がテカる。

駒緒は笑った。

「汗だくやん」

「だって自分で渡すとか無理だもん」

フロム――山岸は情けない声で訴える。こういうのが女子に好かれる理由なんだろうなあとしみじみ思いつつ、俯^{うつぶ}せる山岸の肩を軽

く叩いた。

「おまえら両思いなんだから勇氣出せよ」

山岸はまた「だって……」と呟く。「あいつの言う『かわいい』は異性に対しての好意じゃなくてマスコットの意味でのことじゃん」

「まあまあ」

じとーと睨まれる。

「おまえはいいよな、カッコいいって言われてんだから」

「一番好きなやつに言ってもらえないなら意味ない」

「はあー？」

呆れたように見つめられた。

「おまえって冷めてるのな」

「別にそういうわけじゃない」

「それか、ただのカッコつけマンだな」

「言うねえ。当たってるけど」

当たってんのかいと山岸は笑う。笑窪えくぼに愛嬌があった。そのくらい母性本能を揺する要素があれば振り向いてもらえるのかもしれないと思いつつ、ブレザーの胸ポケットに手を入れる。

「ほれ。元気出せ」

「うお。さんきゅ」

おもむろに一口チョコを渡すと山岸はすぐに機嫌を直した。単純なやつだ。こいつのそういうところがわりと好きだ。

もそもそ食べながら山岸は親指に付いたチョコを舐め取る。

「真優はさ、めんどくさい男は嫌いなんだって。だから男らしい男にならんといかんの」

「めんどくさいのと雄々しいは対義語じゃないだろ」

「んー。なんかな、シヨタって言われた」

「誰に？」山岸は目尻を泣きそうに下げる。「杏奈」

「あー……こいつはまったく……」

携帯で音楽を聞いている杏奈はまったく気付かず、ぱらりと雑誌

のページをめくる。

こいつにはデリカシーってものがない。恋するオトコノコを何と心得てるのか。意外にデリケートなものなんだぞガラスのハートなんだチクシヨウ。

杏奈は友達に呼ばれて席を立つ。窓の外をなにやらキャーキャー言いながらはしゃぐ姿は愛らしくも、何だか憎らしくもあった。

杏奈を眺める俺を山岸は睨む。

「おまえら両思いだからいいよな」

「何を言うか。俺は片思い爆走中だぞ」

「そう思ってるのはおまえだけ。さっさと告れよ」

「……山岸さあ、デリカシーないよな。意識的な嫌味は杏奈より質^{たち}悪いぞ」

「逆に無意識の嫌味ってどんなだよ」

首を傾げる。「さあ？」

「わかんないなら使うな」

チョコの包み紙を返された。俺に捨てろということか。

「ラブレターは別に俺が渡してもいいけどせめて文は自分で書けよな」

ゴミを投げる。一番後ろの席から黒板の隣にあるゴミ箱はさすがに遠すぎた。真ん中あたりであえなく墜落する。

無視することにした。

「駒緒って字だけは綺麗だから」

「つまり心は汚いと」

「うん。真っ黒」

「そうかいそうかい」

山岸は頬杖をつく。視線の先には真優の背中があった。

「なんだかなー……ラブレターって古いんかな」

「メールで送れば？」

「なんとなくイヤ」

「じゃあ直接言え」

「勇気が出ない」

「電話」

「顔が見えないのはちょっと……」

「なら勝手にしろ」

優柔不断は嫌いだ。

「好きなら好きって言ってこい。俺は毎日言ってるぞ」
思わず駒緒に向き直った山岸が苦笑する。

「駒緒とおれは違うの」

「そうか」

「そうだ」

溜息をつく横顔はなんだか哀れだった。

「恋って大変なんだな」

「当たり前だろ。簡単すぎたらむしろ怖くなる」

「幸せすぎて？」

山岸は頷く。そんなもんかねえ……と近づいてくる杏奈を見た。

「杏奈」

「なに？」

椅子に座りながら杏奈は応える。

「今日の放課後も劇の練習する？」

「する。何か用事あるの？」

「ない。劇やってく」

杏奈の髪に手を伸ばす。

三つ編みを二つ作ったところで気付かれた。

「ちょっとお。ちゃんととかしといてよ」

「櫛」

「ない。手櫛で頼む」

「髪が傷むぞーいいのかー」

「いいのだ」

ムスツとしたふりをする杏奈はふと山岸を見た。

「それ何？」

視線の先にあったのは件のラブレターだった。

山岸はニヤリとする。

「ラブレターでござい。見る？」

「見る」

「やっぱ駄目」

「けち」

「けちじゃないですよーだ」

「けちじゃん」

二人は一瞬見つめ合って破顔した。

「こどもだねー」

「そっちな」

駒緒は掴んでいた毛を引っ張る。勢いよく杏奈が振り向いた。

「あんたは何がしたいの!？」

「なんとなくイラッと」

「なんとなくイラッと？」

「……」

墓穴を掘った。杏奈の目が怖い。

「杏奈――」

「話しかけんな」

……怒らせた。

山岸が解体される前のビルを見るような目で俺を見た。

「終わったな」

「ああ」

終わった。

《第三章》（本文）

恋愛はうまくいかない。

高校生なんていう中途半端に知識をつけた者同士だと更にうまく

いけない。

うまくいかないんじゃない。思い通りにいかない。

好きになって告白して手を繋いでキスをしてプロポーズして結婚する。

相手は告白に頷いて手を繋いでキスをしてプロポーズを受けて結婚する。

スムーズにいくはずがない。それはわかった。

そもそも告白すらさせてもらえず、手を繋ぐのはNGだから手首を掴み、キス以降はもつての外。拒絶されまくりだ。嫌われてるわけではないことは知っている。仲は良い。話もそこそこ一致する。一緒にいてつまらないわけではない。好きになってもおかしくない。――なのに、友達止まりだ。

まるでメリー。メリーはただの友達……昔好きだった歌の歌詞。俺はきつとヘタレだ。

よく告白する人間だと思われているようだが、きつと俺はヘタレだ。

うまくいくと思って告らない。また駄目だろうとどこかで思っている。

だけどやめられない。

もしやめたら他の男が杏奈に告白することは目に見えている。杏奈はかわいい。男の理想をかき集めたような外見をしている。問題があるのは配慮に欠ける言動だけだ。

「ああ、わたしも舞踏会へ行きたいわ」

「叶えましょう」

「あなたはだあれ？」

「わたしは魔法使いナムルアムルニコ。魔法の国から来た魔法使いです」

どうしたものか……山岸みたいにラブレターを書くべきか、それとも現状維持か……友達以上を求めるのは端から不可能なことなのかもしれない。

「ナムールアムールニココココー！」

「まあ……なんて美しいドレスでしょう。こんなに綺麗な靴まで……
……ありがとう、ナムルアムルニココ。これで舞踏会に行けます」
やべ。コが一つ多かった。

「いいのよ、ルンデレラ。あなたのルンルンで王宮の不幸を吹き飛ばしてきなさい」

「わかりました！」

それにしてもこのストッキングとやらは寒い。スースーする。よく女子が穿いているから温かいのかと思っていたが、風通しが抜群だ。これだったら素足のほうがまだいい。

「はい止め。『ナムルアムルニココ』が叫んだら衣装替えね」

まるで監督のようにふんぞり返って演技を見ていた杏奈が手を叩いた。

舞台監督だから略してブタカン。豚の缶詰みたいだ。

杏奈の見た目は豚とは正反対だけれど。

駒緒は杏奈の前にひざまずく。

「ストッキング、やめたいです」

「駄目よ」

即行で拒否られた。

「杏奈……」

「なあに？」

「ナムルアムルニコだから」

「ん？」

「ナムルアムルニコ。ナムルアムルニコじゃないから」

「んん？」

「……………」

「いえ、なんでもないです」

間違いをとことん認めないつもりらしい。ワガママ女め。

「俺じゃなくて杏奈が姫さんやればいい」

「ん？」

「それで俺が王子やる」

「んん？」

……。

また拒まれた。ロンリーローリングだ。空回った。

「じゃじゃーん」

「……………」

ふいに眼前が真っ白になった。

ひらひらした布が顔にまとわりつく。

これはまさしく――

「……王子と出会うシーンとかガラスの靴とか落とす前に結婚すんの？」

「うむ。ちゃんと台本読め」

「……………」

衣装係がウエディングドレスを目の前に広げたのを契機に、話はそこで中断になった。

《第4章》（本文）

ナムルアムルニコとは魔女だ。

魔法の杖を振るだけでルンデレラの積年の願いを叶られるということでもないオバサンである。

髪には少し白髪が混じり、糊のきいたスーツを着たオバサンである。頬はほんのりピンクで少年のような肢体。そして誰よりもポニーテールが似合うオバサン。

そんなオバサンを演じるのが、ボーイッシュなガール――若野美もしやみ優ゆうだった。

若野もしやを若野わかのと間違えて呼ぶと『笑顔のマンドリアン』という必殺技を喰らうことになる。アレは二週間利き腕を痺れさせるといいう、およそ女子が使ってはいけないと思われる技だ。

さらに言えば美優みゆうを美優みゆうと間違えて呼ぶと無言でつねられる。
まるでトーキー。

トーキー娘。

そして肝心のルンデレラ。ルンデレラはあくまでも愛らしく。いとおしみ愛されるような灰かぶりの少女。ピンクのドレスが世界一似合うのだ。

王子はいわゆるカボチャパンツを穿いた野代真実やじろまみ。見ようによってはハーレムに見えないこともない状況に陥ることのできる劇である。

監督は杏奈。

副監督は担任。

ルンデレラは美しい少女で貧乏な女の子。

時間が足りないという理由で王子とルンデレラは元より知り合いという設定だ。

幼馴染みが実は王子だということに驚きつつも距離を置くルンデレラ。王子はルンデレラに思いを寄せながらも貧しい彼女とは結ばれてはいけないという自分の身分に絶望する。

そんなこんなを乗り越えて二人は結婚するという、園児相手の稚拙な劇なのである。細かいところは省く。とことん省く。それがブタカンの意志ならば従わざるを得ない。キャストに拒否権はない。

「下手くそ！」

たえ怒鳴られても。

「この大根！」

たえ罵倒されても。

最近、足蹴にされるのが意外と嫌じゃないと気づいてしまった。むしろもっと構ってほしいと思う。ここまできるともう病気かもしれない。

「あなたと結婚できて私は幸せよ！」

この言葉が俺の最後の台詞だ。……恥ずかしすぎる。

台詞を考えたのは杏奈だ。どこまでも俺を笑い者にする気らしい。

——本番の日。

真っピンクのドレスがヒラリとはためく。園児たちはこの世にこれ以上愉快なことはないと言わんばかりに爆笑した。

王子は微笑む。

「ああルンデレラ。もうきみを離さないよ」
離してくれ。

真実は顔がひきつっていた。役者としてはまだまだだ。離してくれと——許してくれと言いたいのは真実のほうだろう。

可哀想に。杏奈と友だちになるからこういう目に遭うのだ。災難としか言いようがない。

ともかくも、劇は大成功だった。目の下にくまをつくっているのは相変わらずだが、ヤツラは年相応に笑っていた。それでいい。子どもはそうあるべきだ。

私立。

幼少部というらしい。その笑顔の裏で、ヤツラは中学生並みの教育を受けている。このくらいの息抜きは必要不可欠らしい。その『息抜き』として白羽の矢が立った炉端高校の面々としては、嬉々としてとは言わないものの、まあそれなりに、頑張った。そこそこウケた。ちなみにその後、六年ほどその行事は続くのだが——終止符を打つのは俺、というか、俺といいたいけな少女だ。

炉端高校は消える。

跡形もなく。

後腐れもなく。

何もかも、一切合切——全てを消される。

『消される』のだ。

たった一人の少女の家出が原因で。

俺は止めるでもなく、ただ立ち尽くしただけだ。

——だからさ、どうせだったらもっと早く決めるべきだったね。

あのとときと同じ。

俺は、目紘鏡を見殺しにした。

《第4章》（後書き）

受験が終わったわけではありませんが、何となく9時に一時勉強を切り上げ、3つ書いてみました。文章力は以前より、よりいっそう落ちていきます。大目に見てください。

序章

「夢を見るだけなら簡単なの。それで夢を思いつくまでが長くて苦しかったら、実現するのはほぼ不可能に近いと目紘は思うのね」

だって疲れちゃうものと目紘^{まみだ}は言った。

目紘^{かがみ}鏡。ポニーテールがキリリと似合う小学二年生だ。細い手足というよりも俺に言わせりや栄養失調の蜘蛛のような四肢をこれまた爪楊枝みたいに細い身体にからうじてくっつけている。見た目とは正反対におとぼけた彼女は今日ものんびりとした口調でよくわからないことを言った。おそらくは頭が良くて真っ当かあるいは正論を言っているのだろうけれど、脳みそがシャッフルされた後の俺には大して理解ができるはずもなかった。できたのは馬鹿みたいに口を開けていることだけだ。

目紘は身の丈よりも倍は大きい椅子に（いわゆる社長椅子とやらに）深く腰を落ち着かせ、抵抗すら最初から放棄している俺を爬虫類のような無表情な目で眺めていた。吐き気がするような薬品の匂いに酔いながら頭の中まで凌辱されたような気分で行寺は冷たい鉄の床に仰向けで寝転がっている。望んで寝ているわけではない。耳からはピンクの半固体状の物体が流れ出していて、およそ小学生の理科教材としてはけしからんと思われるが目紘はまったく頓着しなかった。あぐらをかいていた椅子から「どっこいしょ」と年寄りくせえ掛け声と共に降りると、すぐ足元にいた俺の頭を踏みつけた。軽いからといって侮ってはいけなかった。カラッポの脳にはちよつとばかしの振動さえ響いて反響する。目紘が不気味に「うふふ」と笑った。

「普段の貴方ならその体勢で私のスカートの中也見えたのにね。残念」

俺は何か言い返したらしかった。目紘はまた笑う。

「両目がそろって陥没するなんて楽しいでしょう？　それから頭蓋

骨が開くなんて特技、私は思いつきもしなかった。行寺ゆきじってユーモアのセンスがあるみたい。いっそ芸人になってみたらいいと思うの。貴方が売れるために少しだけならお手伝いする」

目紘が少し手伝ったら俺は大統領にだってなれるだろう。遠慮する、とがらんだ目の目で答えた。あら残念乗り気だったのに、と子供みたいに目紘が言う。そして相変わず小さな靴の裏とディープキス真っ最中の俺の口がその間に早くも限界を迎えた。それでも我慢したんだ。だけど顎を外されて爪先を喉の奥まで突っ込まれたら噎むせるのは人の悲しい性だとも言える。そのためにあっさりと小学生が逆ギレのしてしまうは自由な校風をスローガンに掲げた校長のせいなのである。ぜひとも頭と目と顎が元に戻ったら辞職したい。たとえ戻ってなくとも辞めたい。この女がいない世界ならどこだっていい——俺ハ、人間ダ。

「……ヴ……」

腹の中心が疼く。目紘が踵を落としたのだ。死ねクソヤロウと言おうにも声帯が潰されていた。さっき声が出たのはほら、あれだ。蛙が踏み潰されて空気が口から抜けるときの音みたいな。

「中身がなくても痛みは脳に伝達されるのかしら……」

たったそれだけを確かめるためにヤツは怒りに任せて俺の十二指腸をピンポイントで踏み潰したのだった。死ねクソガキ。脳みそが耳から天辺からと出てしまっているので頭からの指令はほとんど皆無と言っていいほどだ。行寺がかうじてできたのは目で語ることだけだった。

「苦しさは伝達されるのに痛みは違うなんてつくづく面白いのね」
それは面白いと思ってるやつの声じゃない。面白いならまず笑え。
「困るわ」

困ってるのはこっちだ。

「ねえ、駒緒こまお」

遂には下の名前で呼び捨てしやがった。

「貴方の名前ってバランスが悪いと思う。行寺駒緒。同姓同名がい

たとしてもそれはそれで素晴らしい名前だと私は絶賛できるのだけれど、貴方が行寺駒緒って名前であることがひどく腹立たしくて堪らないの。どうしてかしら。ああ……そうね。きつとアレなのよ。――見ただけで憎悪がこみ上げる。名前を聞くと発狂しそうになる。本人が目の前にいたら無力な蟻のようにプチッと殺してしまいたくなる。――そういう類いの人間なのね、私にとって。つまり生理的に受けつけないのよ」

もったいぶらずに最初からそう言え。まどろっこしいやつめ。

目紘が両足を俺の上から退けた。

例の眼が俺を見下している。俺は半笑いで見上げた。ヤツの目が猫のように細くなる。

「幸運ってこういうことを言うのでしょうね。貴方はついてる」
憑いてる？

「私の実験台第1号就任、おめでとう」
目紘は俺の顎に両手を添えて無邪気な子供のようになっこりとした。

「これで貴方は私の手足となりました」

俺が足だったり腕だったりしたら気持ち悪いだろうよ。

「元から貴方は気持ち悪いわ」
あらま。

「顔も身体も髪もその存在自体、視界に入れたくない。でも貴方の才能は買ってるの。貴方ほどのビクリドッキリ人間はそうそういないもの」

それを言うなら才能も買った、だろ。

行寺の口座には既に零が4つつく札が千、振り込まれている。現実には逃げようなんて夢のまた夢なのだ。

「まずは目を元の位置に戻して次に脳を詰めるから。顎と声帯は最後でいいわよね。駒緒ってお喋りが鬱陶しいのよ。いっそのことずっと声が出ないようにしておいてやろうかしら」

鬼の所業だ……。涙目で訴えようとしたが、今までの人生で1度

も涙腺を使ったことがないので無理だった。なんで親は涙の出し方を教えてくれなかったんだろう。息子がこういう事態に陥ることを想像しなかったのだろうか。

俺が散らばった脳でうつらうつらと考える間にも目紘は右の目ん玉を指を眼窩に突っ込んで引きずり出した。次は左。グチゅ、という音は背筋を蛆虫が這い上がるような感覚を思わせた。切れた目の端になにやら怪しげな抹茶色の葉をすり込まれる。入れ物を見たらわりとメジャーなインスタントコーヒーの瓶だった。まさかコーヒー豆を塗られているということはないだろう。そうでないことを願う。

「爪を食い込ませー、あーあなたの欲を味わうー」

……俺の脳を塵取り2つを駆使して集めながら、ヤツはセクシャルな歌を歌い始めやがった。小学生のくせに。

「ああー、あなたを感じてーいたい。づんちゃか、らららん、らんぶりっ子なわたしを愛して」

おそらく、いや確実に子供に歌わせてはいけない歌だ。演歌のようなこぶしの利かせ方だが歌詞に『ぶりっ子』なんて使うのだろうか。どんな歌を歌おうと個人の自由だからとやかく言うのもおこがましいことだろうが、それにしたって『あなたの欲を味わう』は駄目だろう。せめてあと5年は待つべきだ。個人的にはあと三十年がグッジョブ。収穫時だ。

「……………」

「……………」

手が止まった目紘と見つめ合ってしまった。軽蔑するような視線なのはなぜだろう——無意識のうちに墓穴を掘ってしまったのだろう。

「薄汚れた大人はこれだから嫌です。かの光源氏もまだ幼い紫の上を性的感情を持ちながら養育し、わずか十二ほどの年齢であった彼女と契りを結び、その理由は義母の藤壺に似ていたからといういかにも自己本位なもの。大人とはなんと浅はかな生き物なのでしょう

か。その欲の深さといったらまるで飢えた熊のよう」

熊かよ。日本の三大随筆を馬鹿にするな。光源氏は天下一のイケメソボーイだ。

「でもいくら大人を嫌うからといってピーターパン・シンドロームにかかっている暇など私にはないの。モラトリアムも不必要です」顎がようやく填められた。ミシミシと聞こえるのはもしや砕ける音なんじゃないかと一瞬疑ってしまった。改めて声を出してみる。

「あー」

ヘリウム吸った後みたいな声が出た。『なんじゃこりゃ』で『おまえはもう死んでいる』に続く『あじゃぱー』だ馬鹿野郎。目紘が俺を蟻ん子でも見るような顔をしていた。やべっ、踏み殺されるっ。「相当混乱しているみたいね」

哀れみの表情だった。一足す一が二でも三でもなく一と答えられない人間に対する面だ。一足す一は、とある状況下では答えが二にはならない。液体や半固体状の一と一を混ぜたら分離する同士の物質でない限りは一つに混じり合う。だから一足す一は一——が真だとしたら、俺は算数なんて嫌いになってやる。算数の定義が崩れるなら数学もくそもない。大学まで卒業した文系一直線の人間からしたら根本からやり直すほど、たかが数の羅列に時間を割くミリットがない。ミリットをとうに超えた次元の話だ。そしてこのミリットもミリットも視界に入らず、ミリットクラシー実力主義に基づいて這い上がってきた俺の全てをぶち壊しにかかったっ——生意気なこのガキンチョは、鏡の名に相応しく俺の表面を浚い、更には内面に隠したことでさえも見通した鏡だった。

目紘がまたあの不気味な笑顔を浮かべる。同じ人間のくせに目紘はまるで人間に見えなかった。

「じゃあ言い直すね。私の手下になってくれて吐き気がするほど嬉しいわ。これからもよろしくね、先生」

「よ、う、む、い、ん、だ」

……おお？　ヘリウムめ……意外にハマるじゃねえか。

「でももうここにはいられないわね。だってみんな死んじやってるんだもん。別の隠れ蓑を見つけないとまた捕まっちゃうわ」

「……………」

行寺は目紘を見上げた。らしくない表情をしていた。

「実家？」

「そう。警察ならまだよかったのにねえ」

目紘は笑う。行寺は目を伏せた。

「行くぞ」

絞り出すような声を出してしまった。目紘はそういうことに敏感だ。しかしすぐに目くじらを立てるほど子供らしい子供でもなかった。むしろ大人を手玉に取って遊ぶ破天荒なガキンチョだ。だが――立ち上がるために手を差し出した彼女は、まったくもって性格とは正反対の、笑顔が似合う小さな女の子だった。守ってやらなきゃと――思わないではなかった。

「四面楚歌だったら上から下から逃げればいいってことよ。それか、楚歌じゃなくて讚美歌にすればいいだけの話」

簡単だわ――背中を見せた彼女は、ニヒルにそう言った。

「私に不可能はあるけど、貴方がいるなら私に不可能は皆無よ」

「俺の特技なんて死なないことくらいだぞ」

「それが貴方の価値でしょ。たった一つの特技なんだから大切にしなきゃ駄目です」

「大切にしたら死ねねえじゃねーか」

「それが私が貴方を選んだ理由よ」

貴方は命に執着している――目紘は言った。

そんなこともなくはない。自殺しないだけマシだと、最近は思ったりする。だって自殺は痛いし他人に迷惑だし、それなのに死ねないし――無意味かなあなんて学習してみた。たまに首吊って瞑想してみたりするけど――迷走してる名僧が瞑想――ふざけてみたりして。

本心は、ただめんどくさいだけ。殺されそうになったら死んでやる。

「行くわよ」

「む」

小さな背中についていく。コンパスを合わせて、まるで金魚の糞みたいな自分。

ふと思う。彼女はいつたいぜんたい何故生きているのだろうか。

つまらなそうな顔をしているくせにやけに元気で楽しそう。排他的なのになぜか年相応に寂しがり屋。温もりを欲しがっている。

そんなこいつが、俺は好きなのかもしれない。

「目紘」

「ん？」

「なんで俺を殺したんだ？」

「……ふふ」

目紘は——笑った。

第一章

——どれだけの愛があれば夢を見られんのかな。

杏奈は言った。愛って何だと訊けば、人それぞれだと言われた。

——でもほしい。

——俺はいらない。

——好きかも。

——そういうのが苦手かも。

杏奈が笑う。

——駒緒は嘘つきさんなんだね。

正直者よりはマシだと、思ったりした。

バカみたいに正直なコイツにだけはなりたくない、思ったりした。

杏奈は世界にとって唯一無二で、俺は世界にとってゴミだった。

ゴミは溢れてる。だからゴミのままがいい。

ゴミ以下はないけどゴミ以上にもなりたくない。価値をつけられるくらいならいっそ、死んだほうが楽だ。

——ねえコマ。

——略すな。

——すごく好きかも。

——そういうの苦手だ。

——……ふーん。そうなの。

嘘だった。あまりに純真すぎる杏奈がどこまでも好きだった。

映像は反転する。

——だからさ、どうせだったらもつとはやく決めるべきだったね。

杏奈は少しだけ大人びた杏奈になっていた。

——……なにを？

杏奈の顔が遠退く。淡くて薄くて見えなくなりそうになった。手を伸ばしても届かない。

心臓を逆撫でされるような気持ち悪さが這いずる。とてつもなく嫌な予感がした。

——結婚式をね、はやくするべきだったよ。

杏奈は困ったように微笑んだ。

——そうすれば私、生きたいって思ったもん。

景色は、暗転する。

「駒緒、ガムテープ貸して」

亭主関白その一。

夫は妻に服従するべからず。

「駒緒、ガムテープ」

亭主関白その二。

妻は夫をパシリにするべからず。

「コマコマコマコマコマコマコマコマコマコマコマ、こっち向けへタレ」

亭主関白その三、どれだけヘタレで、妻がたとえどんなに強敵でも、毅然とした態度をとるべし。

負けるな男。生誕以来最愛最大の敵に立ち向かえ。それに勝たなきゃ尻に敷かれる、小遣いが減る。守れ人権。是れ、行寺家の掟なり。

「駒緒！」

耳元でたまりかねた杏奈が叫んだ。

眉を寄せて額を押し退け、杏奈を視界に入れないまま改めて目の前の最先端機器に向き合う。ガタガタと音を立て、ういんういんと

唸る最先端機器。両手に山のように抱えた作業は俺が手ずからやってもいいが、せっかくのこのハイテク。使わざるもの馬鹿を見る。利用せずになんとする。

さてと、腕まくりした手を杏奈にがちりと掴まれた。いきなりの接触に口をぎゅっと固く結ぶ。

俺は亭主関白なんだ。仮にも妻（妄想）なら後ろをしずしずとついてこい。手を握ってアレコレしようなんざ恥じらいが足りない。百年はやい。俺が恥じる。控えおろう。

「死ね」

印籠を掲げたポーズを何と勘違いしたか、杏奈は俺の手を叩き落とす。このパワハラ女め。訴えてやる。俺の涙のダムは放流寸前だ。だんまりを決め込んだ眼前に杏奈は覗きこむようにして顔を割り込ませる。口をへの字にして眉は逆ハの字。頬が赤く染まって、怒った顔がある。咄嗟に「今、ハラスメントについて考えてたんだ。邪魔すんな」と口走る。

地雷を踏んだ感触を生々しく感じた。杏奈はさらに機嫌を損ね、渋面を隠そうともせず筒みたく丸めた台本で頭を殴る。バイオレンスここに極まったり。

「ふざけてないで早く作りなよ。衣装がないの今んとこ駒緒だけなんだからね。やる気がないなら帰って」

俺？と首をかしげる。俺は真面目にやっていた。多少思考は暴走していたが、鈍感な杏奈にはわかるまい。

視線を感じて見渡すとダンボールの切れ端にガムテープをくっ付けて何だかつくっているらしい総勢二十人がこっちを見ていた。

照れるなあおい。

ガムテープの輪っかに腕を通してぐるぐると遊んでいた手を止める。杏奈の顔は相変わらず真っ赤だ。どす赤い。怒ってるんだか照れてるんだか知らないが、熟しすぎた林檎みたいでからかってやろうかと思ったが、雰囲気的に自重した。下手したら現在十七年と三ヶ月動いてくれている心臓君が止められてしまうかもしれない。そ

れは可哀想だ。あと四日は動いててもらわなければ困る。金曜発売の漫画が買えなくなるじゃないか。

「衣装ってエプロン以外に何かあんの？」

床に座って杏奈を見上げる。

型紙通りに切り取ったピンクの布と白いぴらぴらしたレースは最先端機器もといミシンの上で合体するときを今か今かと待っている。ここに至るまでに1週間を費やした俺としては、小学生のときに2ヶ月かかった雑巾のことを充分に加味して、格段のスキルアップを褒めてほしい。高校生にもなればお茶のこさいさいだ。と言いたいところだが、型紙を用意したのも断裁したのも手芸部の友だちだということとは杏奈には内緒だ。

手を差し出される。

おとなしくガムテープを渡した。

杏奈はそれをダンボールをいじる大道具班に投げたが、その足は微動だにしない。まさかとは思った。だが予想を裏切らず、杏奈はそのまま立ち去るなんて甘っちょろい人間じゃなかった。

「で？ エプロンのしめきりは？」

「一週間前」

まず手芸屋さんに入る勇気がなかった。

女子の波にのまれた。まだあのかん高い笑い声が耳に残っている気がする。

「偉そうに言うな」

「男はエプロンなんて使わない」

「差別だから」

冷たく返された。鈍子め。

「今日からおまえは鈍田鈍子だ」

「黙れ大根。今日中に終わらなかつたら役下ろすからね」

「ぷっぷくぷー」

「消えろ」

ひどいことを平然と言う女だった。かわいい顔したベビーフェイス

スのくせに口が悪い。罵詈雑言の嵐にボクの心は崩壊寸前だ。どうか杏奈の小枝のように細い手足が暴力までふるうようになりませんように。

言いたいことを言った彼女はブレザーを翻し、スカートをひらりと舞わせて颯爽と小道具班のほうへと行ってしまおう。その腕を掴んで「行くな！」とダンディーボイスで囁いてメロドラする勇氣も必要性も感じなかったので、仕方なくもおとなしく、言われたとおりにミシンに向き直った。

「……………」

ただしこれがまた難題だ。なにせ、かたやミシンは机の上。かたや俺は地べたにあぐら。当然のごとく手元がまったく見えない。椅子を使えとのたまうクラスメイトもいたが、残念ながら手の届く場所に椅子がない。空気椅子でミシンを扱うのは過酷すぎる。すぐに足がプルプルだ。

「足プル足プル」

「そんなことばかりしてるから完成しないんですよ！」

ひるがえして戻ってきた杏奈に「どいて」と押し退けられた。杏奈は椅子を引き寄せてガタガタと縫っていく。……………。この、乙女座り。癖になりそうな予感だ。

「苦しくったってー悲しくったってーコートなのー」

「できた。糸処理してミシンを家庭科室に戻しといて」

「むむ」

早すぎる。糸の設置場所がわからずにとりあえずペダルを踏んでいた俺の立場がない。

「ちゃっちゃと行ってきて。戻ってきたら劇の練習だから」

「あと二週間もあるのになー」

「『も思考』は『しか思考』には勝てない」

出来上がったピンクのエプロンを、ぺいっと投げられた。

「あと二週間しかないんだからダラダラしてないで真面目にやってむー」

「むーじゃない」

杏奈はボビンから伸びた糸の余りをぐるぐる巻き取って針をしま
って覆いのような蓋をする。それを無造作に持ち上げると「下持っ
て!」と怒られた。

「杏奈あ」

教室を出る直前で首だけを後ろに回す。杏奈は既にガムテープ班
に混じって作業をしていてこっちを見ない。

「………」

亭主関白その四。

ただし、妻に敬意を払わぬ夫は亭主関白失格である。

そう付け加えた親父のにやけ顔が思い浮かぶ。尻に敷かれた男の
ノロケだ。聞くほうからすれば甘すぎて胸焼けする類いの。ある意
味理想の夫婦像。『もしもおれが亭主関白だったら』という前提で
の話だ。幸せそうでなにより。

だがこれだけは言うておく……親父。

かかあ天下を邁進する杏奈に限った話、《その四》はないらしい。
妻は夫に服従するべからず。当たり前だ。お互いに尊重し合うの
は当然。夫は妻をパシリにするべからず。これも当然、杏奈のため
なら俺は全力を尽くす。その三——俺が強敵になり得るわけがない
ので無視。その四も無視してくれていい。俺は敬意なんて求めてな
い。

ためいき一つ。

杏奈から好意を得る日は遠い。

片想いバンザイ。

第二章

教室ってもんは窮屈だ。どうにも好きになれない。

教室自体は嫌いじゃない。ただ教室に生徒が飽和状態なのがどうにも違和感がある。金魚だって水槽に入れすぎると次々と具合を悪くする。居場所がない青少年。たくさんの人で溢れ返っているのに居場所がない――そりゃそうだ。自分の居場所をつくるに当たって苦労するのにましてやそれが三十人から四十人近く机を並べて動きづらいつたらない。

秘密の話も容易にできない密着度だ。

とかいう物理的な話。

そんなことを問題視してるわけじゃないだろう、世の中。『溢れ返る』って、少子化だったの。これ以上多い時代なんか想像の範囲外だ。

想像力の貧困さを発露するというなら、これ以上増えたら生徒の半数が年間通して青空教室だ。雨の日も風の日もたとえ火の中水の底。虫に刺されたって気にしない。山の辺鄙な高校の宿命だ。授業中に窓からカブトムシが奇襲しても動じない僕たち私たちにとっては教材が飛ばないように風の心配だけしてればいい。

現段階の持論からいえば授業を受けるのは最高三人でいい。俺とお前と大五郎。更にいえば、なんならマンツーマンでも構わない。俺とお前。もっと言えば教室内で一人でも構わない。ひとり酌。

断じて一人が好きじゃじゃない。理由はほらあれだ。ブルーで灰色な俺を皆々様に見せるわけにはいかないとかいうポリシーを順守しようってわけだ。

健気な俺。

泣くなよ俺。

生まれてから今まで繕い続けた底抜けに明るいキャラがほつれてしまう。

ご存じの通り、縫い物は苦手だ。ほつれたキャラも例外にあらず。人生を全うするまでまだまだ長い。一度ほど始めたセーターを例にするまでもなく、キャラ崩壊は時に取り返しがつかなくなる。だからぜひ一人にしてくれ。この悔しさを一人で噛みしめさせてくれ。喧騒うずまく教室内を見渡す。先生は帰りのホームルームが終わった途端にさっさと帰った。さあて劇だ練習だと楽しそうなクラスメイトたちが憎らしい。駒緒帰ろうぜと他のクラスから毎日通い妻する親友の誘いを断った。他クラスのやつにはわかるまい、くじ運が悪い俺たちクラスの苦悩を。

元を正せば最初の学級委員長を選抜するときから俺たちは間違っていた。まかり間違ってもくじ引きなんかでクラスの代表を決めるべきじゃなかったんだ。よくよく考えて議論してめんどくささを吹っ飛ばした討論会にすべきだった。くじ運が悪い委員長がくじを引いたら悪い結果しか出てこないに決まってる。いや、責めるつもりはないんだ委員長。嶋はよくやった。恥ずかしがりやさんの意地を見せたカッコ良かったお父さんは嬉しい。

よりによって全学級全学年が「できることなら回避したい。やるとしても裏方で」という役回りのド真ん中を勝ち取ってきたことについてはきつと俺たちにも責任がある。落ち込むな嶋。愛してる。決まった直後、「他のクラスに、変わってもらえないか聞いてくる」と言えただけで大成成長だ。附属保育園から共に歩んできた俺たちは嬉しかった。授業以外で声を聞いたのは一週間ぶり。元々寡黙だ。ぺちやくちやと喋らなくとも長く一緒にいれば大抵のことは以心伝心する。

嶋にはいつもどおり中心で微笑んでいてもらわなきゃ困る。クラスのアイドル嶋。そのもっぱら微細なフェイスアクションに徹する嶋にそこまで言わしめたとあってはやるしかない。

腹をくくって一ヶ月。嶋への愛情から動き出した劇への道のりはそれなりに陰しくて楽しかった。後悔はしない。絶対にしない。後悔しているのは別のことだ。

劇と反比例するようにずーんと気分は下降一直線にネイビーブルー。まもなくフェードアウト間違いなしだ。

事の発端は今日の昼休み。その会話の中で爆弾は投入された。結果、端的に言おう。実は――ラブレターを書いてみた。

「俺は、ラブレターを書いてみた」

口に出して再確認。うむ、と頷いて前の席に座る杏奈の背中を眺める。

「でも杏奈は受け取ってくれなかった」

あろうことか突き返された。『なにこれ。昨日の謝礼金なら受け取らないわよ』『……金じゃねえ』エプロンをつくってもらったくらいで金一封は差し上げない。というか、それ以前に杏奈宛てではなかった。ラブレターということで思わず相手を間違えた。

愛の力って恐ろしい。

そもそも差出人が俺じゃない。

代筆しただけだ。

「おい」

ついと視線を隣に向け、手紙を返却する。鉛筆回しに奮闘していたそいつの手からボロツとシャープペンが落ちた。

「そ、そ、そ、それ……」

「『返却』だ」

よく聞いて思考しろ。

返答じゃない。顔を赤らめるな。期待と諦めに胸を満たすな。そこにはおまえが三日三晩悩み抜いた愛のメッセージしか書いてない。「悪いが渡すなら自分で渡せ」

三日三晩ではないがそこそこ悩んだ結果、俺には荷が重すぎると判断した。もし俺が渡して相手に俺が告ったと勘違いされたらどうするんだ。これほどめんどくさい勘違いは地球上に存在しない。勘違いに再度顔を赤くした差出人は困ったように苦笑いする。

「そっか……いやごめん」

「まっただ」

迷惑極まりない。杏奈に誤解されたら俺は生きていけない。

本人の知らないところで結成された《ジェントルメンズ（杏奈ファンクラブ）》に知れたら報復される。なぜかは知らない。日々「駒緒、害虫害虫」言ってるんだから喜べばいいのに。

《ジェントルメンズ》の合言葉は『打倒行寺』だ。全国の行寺さん、気をつけろ。

「でも、だって自分で渡すとか無理」

と山岸は情けない声で訴える。こういう可愛らしさが女子に好かれる理由なんだろうなあとしみじみ思いつつ、迷える子羊山岸の肩を軽く叩いた。

俺には関係ない。

「おまえら両思いなんだから勇氣出せよ」

山岸はまた「だって……」と呟く。俺の恋愛感情は杏奈にしか向かないのでそんなかわいらしく言われても全く萌えない。代わりに全人類マイナスイ対する均一な友情を感じてくれ友よ。

「おまえはいいよな、みんなにカッコ良いて言われてんだから」

「一番好きなやつに言ってもらえないなら意味がない」

「杏奈も言ってるって」

呆れたように言われた。杏奈は天地がひっくり返って日本とブラジルと入れ替わっても俺を褒めることはない。

「ヘタレ」

「まあな」

自覚あんのかよと山岸は笑う。笑窪に愛嬌があった。母性本能を揺する要素その2。

俺に笑窪……駄目だ、どう考えても似合わない。

「美優はめんどくさい男は嫌いなんだって。だから男らしい男にならんといかんの」

「めんどくさいのと雄々しいは対義語じゃないだろ」

「でもシヨタは男らしいってかんじじゃないだろ」

「美優は知識の守備範囲が広いな」

プロレスにしか興味がなかった。美優の『男』の基準はムキムキマッチョだ。

「いや、美優じゃない。杏奈」

「……ああ……」

視線を前に向けると携帯で音楽を聞いている杏奈はまったく気付かずにはらりと雑誌のページをめくる。こいつにはデリカシーってものがない。恋するオトコノコを何と心得てるのか。意外にデリケートなものなんだぞガラスのハートなんだチクショウ。

杏奈は友達に呼ばれて席を立つ。窓の外をなにやらキヤーキヤー言いながらはしゃぐ姿は愛らしくも、何だか憎らしくもあった。

俺がシヨタ……むりむり剣道部でがっちり鍛えちゃってますから身長180越えてますから。

山岸は理不尽だと俺を睨む。

「おまえら両思いだからいいよな」

「何を言うか。俺は片思い爆走中だぞ」

「そう思ってるのはおまえだけ。さっさと告れよ」

「告ってるよ」

毎日ポーズしてます。

杏奈は無反応、無視、シカト。目を向けてもくれない。校内じゃ有名な話だ。もはや武勇伝といってもいい。

「意識的な嫌味は杏奈よりタチ悪いぞ」

「逆に無意識の嫌味ってどんなだよ」

「知るか」

「わかんないなら使うな」

そう言い合いながらも山岸の視線の先には美優がいる。なんだかちよつと嫉妬だ。

「なんだかなー……ラブレターって古いんかな」

「メールで送れば？」

「なんとなくイヤ」

「じゃあ直接言え」

「勇気が出ない」

「電話」

「顔が見えないのはちょっと……」

「なら勝手にしろ」

優柔不断は嫌いだ。『顔が見えないのはちょっと……』ならはじめから自分でラブレター渡せ。

「好きなら好きって言ってこい。俺は毎日言ってるぞ」

そしてスルーされてるんだ。嫌なら嫌って言えばいいのに。

思わず向き直った山岸が苦笑する。

「駒緒とおれは違うの」

「そうか」

「そうだ」

溜息をつく横顔はさすがになんとか哀れだった。

「恋って大変なんだな」

しみじみと思う。恋って始まるまでが大変だ。始まってからも大変だ。

「当たり前だろ。簡単すぎたらむしろ怖くなる」

「幸せすぎて？」

山岸は頷く。そんなもんかねえ……と近づいてくる杏奈を見た。

順調どころかこっちは停滞横一線だ。

「杏奈」

「なに？」

椅子に座りながら杏奈は応える。

「劇の練習する？」

「する。何か用事あるの？」

「デートしようかと」

「行けば？」

「……………」

まあ、ね。

誘っても気づかれないことなんてしょっちゅうですから。今更傷

ついたりはしない。無神経イズ杏奈。ふてくされて抜けるなんてこともしない。

そんなことしたら嶋が「やっぱり駒緒は嫌だったんだ……」と落ち込む。

経験者は語る。確実に嶋の親衛隊にボコられる。

杏奈の髪に手を伸ばす。腹いせに三つ編みを二つ作ったところで気付かれた。

「ちゃんとかしといてよ」

……ああ、髪を触るのはセーフなのか。このまえ服の裾を掴んだときは大騒ぎしたのに。

「くし」

「ない。手櫛で頼む」

「髪が傷むぞーいいのかー」

「いいのだ」

平然として言う杏奈はふとラブレターを手の内でもてあそぶ山岸に気づいた。代筆だとバレますように。「それ何？」

「駒緒のラブレター」

「……嘘」

「嘘じゃねえよ」

「駒緒にそんな勇気ない」

二人は一瞬見つめ合って破顔する。二人して納得するな。なければのプライドがズタズタだ。

掴んでいた毛を引っ張る。

勢いよく杏奈が振り向いた。般若の形相だ。

「……なんとなくイラッとしまして」

「『なんとなくイラッと』？」

「……」

墓穴を掘った。杏奈の目が怖い。

山岸がやけにさみしそうに俺を見る。このあとの展開はお決まりっちゃんお決まりだ。

ずずいと遠慮なく山岸が後ずさる。「じゃあな駒緒」
惜別の言葉がこんなになんて。最終回の気分だ。

「いつてくるぜ親友。あの世で会おう」

「ああ、何十年か後にな。……おまえら結婚したら苦勞するよ」
周りのクラスメイトが空気を察してスペースを空ける。巻き込まれたくなくて教室から退避する。いい迷惑だ。誰か杏奈を静めてくれ。

これから始まるのは夫婦喧嘩でも痴話喧嘩でもない。もちろん暴力なんて皆無だ。当たり前。杏奈は暴力が嫌いだ。弱いものいじめなんて杏奈の信念に反する。そうであることを願う。

杏奈はなぜか自信満々で「大丈夫」と胸を張った。

「駒緒はMだから心配しないで」

「俺はMじゃない、ノーマル、ニュートラル、Nだ。Mかそうじゃないかは俺が決めることでありたい。それが選択の自由」

抗議もむなしく杏奈は悪魔的に笑う。小悪魔じゃなくガツツリ悪魔なところが杏奈らしいといえなかった。そんな女でも可愛く見えるのはきつと本当に杏奈が可愛いからだだろう。かわいいかわい。

「覚悟はできてる？」

「アーユーレディ？」

「まあ、いちおう言っておくが、俺は男だ。」

「この際、はっきりさせよう。好きだ」

「どうもこいつは聞き逃している可能性が高い。」

「やっぱりMじゃん」

「……食い違いってかなしいな」

「もしかしくなくても相性が悪いんだろうか。」

悪そうだな。破滅的に悪そうだ。間違いなく悪い。だけどそんなこたあとづくに悟っている。心配ご無用。恋は盲目だ。真っ暗闇でも掴みとれるとか言うくらい勘違いな自信がなければこわくて告白

なんてできない。俺はそういう人間だ。これでも覚悟を決めてや
てる。手に汗握る一大決心だ。

だから正直、ここまで逸らされるといつそ当たって挫けたいが、
他方望みがあるうちはやめられない。恋は麻薬だ。依存性が高い。
法律で禁止されてないあたり、規制を厳しくしてほしい。恋の第6
条。すべて国民は告白に対する返答を明確な言語をもって答えるべ
し、とか。第一条はみんな好きなように恋せよだ。自由に羽ばたい
てください。他人の色恋沙汰は俺の知ったことじゃない。あいにく
自分のことで手一杯だ。

教えてください恋のキューピッド。杏奈は俺を一体クズのヘタレ
で役立たずというほかにどう思ってるんでしょうか。マゾだと本気
で思われてたらどうしよう。泣く。

「二人つきりね」

杏奈は呟く。そしてすり寄る。

「……………」

杏奈がおかしい。

「……………」

三秒思考停止。

「コマ？」

すみませんが誰か。戦線離脱を願います。

後ろ指さされたって知ったことか。この展開は不味い。命に関わ
る。俺にはわかる。

杏奈に手を出したら殺される。

はじめての告白どころの騒ぎじゃない。大目に見てたやつらが動
き出す。さながら眠れるナイト。永遠におねんねしててほしい。

「待て待て待て！ 話し合おう！」

ヘタレ必死。命は大切にしようみんなみんな生きているんだ友だ
ちなんだ。

ぶんぶんと手を振り後ずさる。

いざそれらしき雰囲気になると怖じ気づくのがチキンの証。いい

さいいさ馬鹿にしろ。油断してた俺が悪い。

「話し合いの余地はないわ」

杏奈は一步踏み込む。いやだいやだやめてくれ。俺が悪かった。もう何でもするから許してくれ。二人つきりになった途端甘える？ そんなツンデレ俺は求めてない。単純にツンツンのままでよかったそうなんです俺はマゾ。デレデレするのは俺の役割だ。二人合わせてツンデレなんだ、ほら相性ばっちり一件落着さっぱり大団円。何の不満も悔恨も残さない。

俺からアタックするのはいいが杏奈からは駄目だ。地球が回り始める前から決まっていた大原則を揺るがしたらいかんだろうよ。嶋は高嶺のアイドル、杏奈は氷山に咲く花。同じ山でも登れない山がある。嶋は無防備なのに対し、杏奈は一人でセコム。あーあー認めようわかってたよ踏み込みすぎたら駄目だって。女子に優しく男子に厳しく。鉄壁の男嫌い。山岸は例外だ。

「二人つきりですることなんて決まってる」

「決まってない決まってない！」

そうだ手を繋ごう、半歩下がって歩きましょう。そういうことですね杏奈さん了解です。

「踊りましょう」

「踊らない！」

「さあ舞踏会へ」

「心療内科に行こう！」

どうした杏奈。本当におかしい。

杏奈はムツとした顔で立ち尽くす。少しうつむいた表情が寂しげに見えた。

よしわかった。

「わかったよ……そんなに踊りたいなら、踊ろう」

「え？」

杏奈はさっと顔を上げる。その呆けたような顔を笑い飛ばした。俺が今まで杏奈の望みを聞いてやらなかったことはない。よっし、

決めた。もう諦めた。後にどんなことが待ち受けていようとも俺は迷わない。期待に沿う働きをする。

「駒緒……」

杏奈の手を握る。その正面に跪いた。

言うべきことはただ一つ。

「シャルウィーダンス？」

決まった。俺カッコ良い。ヘタレもやればできるんだ、どんなもんだい。

自慢げに杏奈の表情を窺う。

「え……なんで？」

今までに見たこともないような形相をしていた。

「なんでじゃないよこの大馬鹿！ ハゲクズトンマバカ！ ぜんっぜん台本と違うじゃん何やってんの！？ マンツーマンでやってあげたのに台詞が頭にないんじゃないじゃ意味ないじゃん！ この頭ん中お花畑野郎、期待した私がバカだった！」

ふいっと杏奈はそっぽを向く。地雷2発目。バカって三回も言われた。

「……ああ」

確かに言ったな、『マンツーマンで構わない』って。『俺とお前』とも。

ひとりごと、聞かれてた。

杏奈はぶんすか怒って教室から出て行ってしまった。

すぐに入れ替わりで入ってくる《ジェントルメンズ》の面々。全員男。揃いも揃ってゴツい体しちやってまあ。耳がはいこって。

リーダーらしき男が「わかってるな？」と口を開く。

……あーあ。

「俺は何にもしてない」

「言い訳無用」

十人前後が周りを取り囲む。

杏奈に関わるとろくなことがねえ。

恋の第一条。

みんな好きなように恋せよ。

……やりすぎ禁物。

第三章

恋愛は思い通りにいかない。

高校生なんていう中途半端に知識をつけた者同士だと更にうまくいかない。あるていど経験や知識を積んだ者同士とか初な不器用極まった青春でもなく、俺たちはとみに半端な時期にいる。どっちかに偏った位置ならよかったんだろうか。よくいうだろう、やるならとことんやれ、中途半端で終わらせるくらいならはじめから手をつけるな。全か一かの法則。ちよつと違うか。とにかくニューロンはすごい神経伝達組織ばんざい。授業で習いたてはやはや、得た知識を使いたい症候群。

あれだ、自動車の免許をとった直後にもまま起こる。オートマでも二輪でもマニュアルでも、乗り回したい、得た知識がどれだけ身についたか知りたい。そんなかんじ。二輪をとったときはまさにそうだった。同じ教習所に通ってたやつがバイクで事故ってから乗らなくなったが、それも1週間の謹慎、終了。

だいたい慣れてから乗らなくなった。慣れてからが乗りたい盛りとか通い妻な親友が力説していたが事故ったやつだといまいち説得力がない。自宅のガレージに突っ込んであとで親にこってりしぼられたらしい。本人他人無傷。重傷一台。

警察沙汰にならなかつただけマシだ。学生である間、警察はまずい。被害者と加害者。被害者にも落ち度はあったんじゃないですかと何の関係もないギャラリーに叩かれるのが世の常だ。あらゆる角度で物事を見るのは非常にいい心がけだが、そういう疑問は解答が出てから口にしてほしい。俺は深く傷ついた。

「いくらやられたからってお前も何かあいつらの気に障ること言ったんじゃないのか？ よくよく思い出せ」

思い出したくないんですけど。

「……まあ、やったといえど、やりました」

こんこんと担任に苦笑されながらお説教。顔は笑っているが要約すればいいかげんにしろってことだ。担任になってから十二回目のケンカとなればうんざりするの当たり前だろう。俺だったら見捨てる。

生徒指導室と銘打たれた説教部屋で担任と二人っきり。

——二人っきりでやることといえば決まってる。

劇の練習じゃねえぞ。

まあ、ケンカはどうでもいいとしてと担任はわきに置いていた青いファイルを開く。

「じゃあ、始めようか」

始めたくない身を乗り出すなケンカどうでもよくねえよ煙草くさいよ先生。禁煙してるんだと自慢げに女子に語ってたくせにあの決意は三時間で消え失せたのかこのやろう。

ぎゅつとこぶしを握る。逃げに逃げてついに年貢の納め時ってわけだざまあみろ俺。恨むなら過去の俺を恨め。他人を恨んでもろくなことにならない以上浅い経験論。

「進路についてなんだがな……」

出た。来たよ『進路について』のお話合い。進学か就職か選びましょうってアレだ。何で一年のうちにやるんだ。俺はじっくり考えて最後の最後まで粘る大器晩成型なんだよ。ゆとり教育ド真ん中をせかすな。ゆとりの目で見守ってくれ。

「どうしたい？」

「……決まってるじゃないです」

「決めてくれないと先生たちも困る」

いらいらと担任は広げたファイルの端を叩く。

二年次のクラス分けはまず文理で分けて、それから目標進路別に国公立大と私立大と就職に分ける。進学組は二年の秋までには全科目を終わらせることが目標だから教師としては何かと早めに決めてもらいたいんだろう。

「お前の学力なら、数学さえ伸びれば大抵の大学は手が届く。推薦

は素行がコレだから無理だと思いが学力だけならなんとかなるんだ。一般を視野に入れて考えろ。何も決まっていらないならとりあえず文系に入っとけ。行寺は国語と英語だけは出来がいいからな。英語は文系にしても理系にしても強みだ。苦手科目は避けるか克服しろ。途中から文系から理系にいくのはちよつと難しいぞ」

担任は最後だけ言葉を濁す。

そりゃそうだ。一時間に三十ページ以上進む授業が毎日7限。一日休んだだけで大損害だと文系に進んだ先輩が漏らしていた。

単純に考えて一日で210ページ進む。そいでおいて文系と理系じゃ教科書自体がほとんど違う。

たとえ転科試験に合格しても、追いつけない。覚悟を決めていかないと後悔したときには手遅れだ。

——ということをずらずらと担任は熱く語ってた。俺は机の下でナンプレをやってた。怒られた。ナンプレ没収。

「やる気があるのかお前は！」

ばんっ、と机を打ち、担任は切羽詰まった表情で言う。

「いいか、よく聞け。お前の人生なんだ。お前が決めなくてどうする。いつまでもへらへらしてんじゃない！ おれはお前が落ちぶれたってバカが増したってどうでもいいんだ。だけどせめて卒業だけはしろ。それだけで価値があるような学校なんだよココは。炉端高校っていえば名門中の名門だ。不景気だって大企業の就職口は数多いだ。新入生向けのパンフ見て安心しろ。就職率進学率100%だ」

「多少甘い見立てですけどね」

大人ってこわい。

「余計なことは言わんでよろしい」

えへんと咳払い。吹っ飛ぶ信頼。さよなら評判。

いや、同じ法人下の大学に進むやつが多いつつだけ。100%なのは事実。

「じゃあ俺、同系列の大学いきます。推薦ください」

「受験なめんな」

ファイルの角で叩かれた。

「だって卒業生の4割は持ち上がりじゃないっすか」

「持ち上がりなわけねーだろ。実力がなきゃ落とすに決まってる。どこの高校なんて関係ない。第一フェアじゃない。んな最屑するんだよ」

ただ高校の中間期末試験と入試の出題の仕方と似てるだけ、らしい。そう考えれば三年間まるまるその大学オンリーの対策をしていることになる。もちろん内容は定期試験の比じゃない。難しすぎて半分も当たれば充分合格圏だ。

そこまで説明して担任は力尽きた。

ファイルをためいきと一緒に閉じる。

「まあいいや。まだちょっと時間あるし、親御さんと相談してこい」
「へーい」

「ちゃんと決まったら報告しろよ。……んじゃお前もういい、帰れ。劇の練習でもどこでも行っちまえ。帰り道は女子を送ってやること。寄り道しないこと。ついでにもうケンカするな。推薦考えてやるから」

いちおうお前のほうが被害者だしなと担任は頭を搔く。そしてためいき。

「苦労かけます」

「はやく行け。ついでにあいつら……なんだっけ、杏奈のあいつら。ついでに呼んでこい」

杏奈のあいつら。

固有名詞覚えてないのかこの教師。

うっとうしげに追い払われ、教室に戻る。既に誰もいなかった。女子を送るものにもない。ひとりぼっちだ俺。

黒板にはでかでかと《音楽室集合！！（駒緒行寺）》と歪な字体で書いてある。そういやここで杏奈好き好き大好き倶楽部のやつらが殴ったり蹴ったりしてるときに二、三人ここでごうごめいていた。目障りだったからよく覚えている。

北と嶋と美優だ。女三人集まってケンカを見物かと思ったが、よく考えたら美優以外は背中を向けて震えてた。いちおう、あとに残された俺のために伝言を書いてくれたんだろう。優しいクラスメイトに感謝だ。

ありがとう北、嶋。

美優は明らかに便乗だ。ケンカとプロレスは違う。

おとなしく音楽室に向かう。

行かないと杏奈に会えない。あいつ、顔だけ癒し系だ。

途中、隣のクラスに寄って杏奈のあいつらに声をかける。全員学年も組も違うが、ダウンした俺を発見した教師がここに待機させた。「なんだよ」

入った瞬間睨まれた。

「西村先生が呼んでた。じゃ」

その視線の強さに気圧されてそそくさ出ていく。

陰険な男は嫌いだ。

杏奈に振り向いてほしいなら正面からぶつかってけばいいのに。じめじめした連帯感。勝負すらできない。健気にラブレターを書く山岸のほうが断然好ましい。今回なにがあいつらの気に障ったのかもわからない。まだ何もしてなかった。始まる余地もなかった。劇の練習。まあ、現実はそのまんまだ。色っぽいことは皆無。

やっぱり八つ当たりか、一瞬それらしい雰囲気になったからか。

俺からじゃなく杏奈からってのがネックかもしれない。男心って複雑だ。杏奈に手を出さない辺り、微妙に紳士。

「……………」

好きになって。

告白して手を繋いで。

——そこまで。

杏奈とはそこまでだ。以下現状維持。

スムーズにいくはずがない。それはわかってた。杏奈の性格からしてそれは無理だ。そもそも最近は告白すらさせてもらえず、手を

繋ぐのは諸事情によりNGだから手首を掴む。拒絶されまくりだ。嫌われてるわけではないことは知っている。仲は良い。話もそこそこ一致する。一緒にいてつまらないわけではない。好きになってもおかしくない。――なのに、友達止まりだ。

だからまた駄目だろうとどこかで思ってる。だけどやめられない。もしやめたら他の男が杏奈に告白することは目に見えている。《ジエントルメンズ》じゃなくても好意を抱く男は多い。

男子とは会話すら拒否するから辛うじて話せる俺が目立ってるだけだ。杏奈はかわいい。男の理想をかき集めたような外見をしている。問題があるのは配慮に欠ける言動だけだ。ほんとに。

音楽室に着いてから用意されていた衣装に着替える。みなそれぞれに作業したり練習していたが、集合の一声で集まって芝居の練習に入る。

実は俺、主役でしたり。

「ああ、わたしも舞踏会へ行きたいわ」

台本の中間から再開。通しでやるのはいつのことになるだろうか。台詞はばっちりだ。演技が破壊的。

唯一の演劇部がインフルで登校禁止という最悪の事態。

「叶えましょう」

「あなたはだあれ？」

「わたしは魔法使いナムルアムルニコ。魔法の国から来た魔法使いです」

どうしたものか……棒読みなのは自覚してる。

『羞恥心、捨てるべし』

そう言い残した演劇部員。

『草葉の陰で見守っている。健闘を』

……月並みなボケはいらない。

「ナムールアムルニコココー！」

「まあ……なんて美しいドレスでしょう。こんなに綺麗な靴まで……ありがとうございます、ナムルアムルニコ。これで舞踏会に行けます」

やべ。コが一つ多かった。

「いいのよ、ルンデレラ。あなたのルンルンで王宮の不幸を吹き飛ばしてきなさい」

「わかりました！」

それにしてもこのストッキングとやらは寒い。スースーする。よく女子が穿いているから温かいのかと思っていたが、風通しが抜群だ。これだったら素足のほうがまだいい。

「はい止め。『ナムルアムルニココ』が叫んだら衣装替えね」

まるで監督のようにふんぞり返って演技を見ていた杏奈が手を叩いた。

舞台監督だから略してブタカン。響きだけだと豚の缶詰みたいだ。ドレスに身を包んだ、つまり女装した駒緒ちゃんは杏奈の前に跪く。

「ストッキング、やめたいです」

「駄目よ」

即行で拒否られた。

「杏奈……」

「なに？」

「ナムルアムルニコだから」

「ん？」

「ナムルアムルニコ。ナムルアムルニコじゃないから」

「んん？」

「……このやろう……」。

「いえ、なんでもないです」

間違いをとことん認めないつもりらしい。ワガママ女め。

「俺じゃなくて杏奈が姫さんやればいい」

「ん？」

「それで俺が王子やる」

「んん？」

「……………」。また拒まれた。ロンリーローリングだ。空回った。

「じゃじゃーん」

「……………」

ふいに眼前が真っ白になる。ひらひらした布が顔にまとわりつく。これはまさしく――

「……王子と出会うシーンとかガラスの靴とか落とす前に結婚すんの？」

「うむ。ちゃんと台本読め」

「……む」

衣装係がウェディングドレスを目の前に広げたのを契機に、話はそこで中断した。

嶋を呼ぶ。杏奈が薔薇の美人ならこいつは子犬。一から十まで癒し系だ。

「ちよい俺の名字言ってみろ」

「行寺」

よし。

「北」

今度は小道具班で粘土のリングをつくっていた北佳子を呼ぶ。

白雪姫はシンデレラじゃないぞ。

「俺の名前、言って」

「駒緒」

よし、犯人は美優だ。

「俺はかなしい」

駒緒行寺って誰だよ。十年来の仲が吹っ飛ぶ衝撃だ。

わざとか？わざとなのか？味気ない俺にアクセントをくれるつもりだったのか。嶋と同じくらい無口キャラだから真意が伝わってこない。無意識だと勘違いするぞ、いいのか。

「コマ、ひとりごとうるさい。あんたの名前の区別なんか雪路と分けるために決まってる」

嶋雪路。名字、嶋。名前、雪路。

……なるほど。

杏奈にしては冴えたことを言う。

「ドレス着替えて。はい、結婚式」

ぱんつと打ち鳴らされる合図。相對するのは王子さま。白馬には乗ってない。

俺の結婚相手、野代真実。

俺の王子はいわゆるカボチャパンツを穿いた典型的な格好をしている。とても似合う。実に似合う。これ以上俺を落ち込ませないでくれ。ミニマム王子とラブシーン。ウケ狙いじゃないところがこの劇の良いところだ。

俺は主役ルンデレラ。ルンデレラはあくまでも愛らしく。いとおしみ愛されるような灰かぶりの少女。ピンクのドレスが世界一似合うのだ。……もう一度。ウケ狙いじゃないところがこの劇の良いところだ。

名前がまどろっこしいナムルアムルニコは魔女。魔法の杖を振るだけでルンデレラの積年の願いを叶えられるというとてもないオバサンである。髪には少し白髪が混じり、糊のきいたスーツを着たオバサン。頬はほんのりピンクで少年のような肢体。そして誰よりもポニーテールが似合うオバサン。そんなオバサンを演じるのが、ボーイッシュなガール―美優だ。若野美優。プロレス大好き女。若野を若野と間違えて呼ぶと『笑顔のマンドリアン』という必殺技を喰らうことになる。アレは二週間利き腕を痺れさせるという、およそ女子が使ってはいけなと思うられる技だ。さらに言えば美優を美優と間違えて呼ぶと無言でつねられる。つまりトーキー。トーキー娘。無言の笑顔は凶器です。

監督は杏奈。副監督は担任。ただし担任にやる気は皆無だ。唯一俺たちにかけた言葉が「まあ……ほどほどにな」だ。真っ先に逃げた。学校行事に興味がないらしい。職務怠慢だ。

『ルンデレラ』はあらすじから言えばこうだ。ルンデレラは貧乏な美少女。時間が足りないという理由で王子とルンデレラは元より知り合いという設定だ。幼馴染みが実は王子だということに驚きつ

つも距離を置くルンデレラ。王子はルンデレラに思いを寄せながらも貧しい彼女とは結ばれてはいけないという自分の身分に絶望する。そんなこんなを乗り越えて二人は結婚するという稚拙な劇なのである。細かいところは省く。とことん省く。それがブタカンの意志ならば従わざるを得ない。キャストに拒否権はない。

「下手くそ！」

たえ怒鳴られても。

「この大根！」

たえ罵倒されても。最近、足蹴にされるのが意外と嫌じゃないと気づいてしまった。むしろもっと構ってほしいと思う。ここまできるともう病気かもしれない。

「あなたと結婚できて私は幸せよ！」

この言葉が俺の最後の台詞だ。

台詞を考えたのは杏奈だ。どこまでも俺を笑い者にする気らしい。性悪だ。

本番の日。

真っピンクのドレスがヒラリとはためき、園児たちはこの世にこれ以上愉快なことはないと言わんばかりに爆笑した。王子は微笑む。「ああルンデレラ。もうきみを離さないよ」

離してくれ。真実は顔がひきつっていた。役者としてはまだまだだ。離してくれと言いたいのは真実のほうだろう。可哀想に。杏奈と友だちになるからこういう目に遭うのだ。災難としか言いようがない。

ともかくも、劇は大成功だった。

ヤツラは年相応に笑っていた。それでいい。子どもはそうあるべきだ。

私立青岩森川学園。

ヤツラは幼少部というらしい。

中学生並みの教育を受けているスーパー園児。このくらいの息抜きは必要不可欠らしい。その『息抜き』として白羽の矢が立った炉端高校の面々としては、嬉々としては言わないものの、まあそれなりに、頑張った。本意じゃないがそこそこウケた。ちなみにその後、六年ほどその行事は続くのだが――終止符を打つのは俺、というか、俺といたいけな少女だ。

《彼女》再来。

炉端高校は消える。跡形もなく。後腐れもなく。何もかも、一切合切、全てを消される。唯一生き残った俺は止めるでもなく、ただ立ち尽くしていた。

――だからさ、どうせだったらもつと早く決めるべきだったね。

あのときと同じ。

俺は、目紜鏡を見殺しにした。

第四章

山の学校には虫が出る。蟻に始まり亀虫や蜂に終わる。それ以上に大きな昆虫は今のところ見たことがないが、聞いたところによるとカブトムシ大のゴキブリが出たクラスもあるらしい。

そんなものを退治するのはどれだけ考えても用務員の仕事ではないように思えるのだが、校長の考えは違うらしい。

とりあえず蝶は網で捕まえる。羽がもげた蝶は飛べない。もう一度羽が生えることはない。人間の腕と同じだ。細心の注意を払って捕まえるのだが、虫も生きているものだから抵抗する。俺からすれば狼の群れに入り込んだ羊を逃がしてやる羊飼いのような心境だが、羊のやつはそれを理解しない。そういうことだ。

特に狼である元気が有り余った生徒たちは虫をやれ捕まえろだ殺せだと野次を飛ばす。女だからといっておしとやかだとは限らない。むしろ共学にいる女子のほうがまだ大人しい。かしまじさはさることながら、口の汚さは粗野な男子に劣らない。女子校に対する俺の理想は崩れた。夢は砕けた。バリンバリンに。

「駒緒さん」

「ん？」

振り向くと小さな女性が見上げていた。

小さな女性——と、生徒のことを呼ばなければならぬらしい。

たしかに小さな女性だ。言ってることはわかる。ただちよつと聞き慣れるには時間がかかる。

「なに？」

開いていた新聞を机の上に乗せる。しゃがんで視線を合わせると少女はにっこりと微笑んだ。

「新聞がほしいです」

「新聞ならあそこにあるよ」

指差す先には棚の上に置かれた新聞の山ができていた。全国紙だ。

学校が生徒の保護者から回収した金の中から買っている。一クラスに1つなので日直の生徒が取りに来る仕組みだ。

小さな女性の名札には一年生と表記があった。まだ1学期だから場所がわからないのだろうと半ば反射的に言ったのだが、少女の目的は違った。

俺が指を差すのと同時に少女は俺を指差す。

「駒緒さんが読んでいるほうが読みたいです」

「あー……これはちよつと……」

毎朝、家に届く地方紙。母親が勝手に契約した新聞だ。金は俺が払ってる。理不尽だ。

「あっちのほうが為になると思うよ」

「広告みたいなのが大半を占めてて捲るたびに落胆するんです。また記事じゃないのかって」

少女は少し生意気そうな表情をしていた。――たぶん、目的は言っていることから少しずれたところにあるんだろう。

口の端を引き上げる。こういったガキはたびたび用務員室を訪れる。そういうやつらにはいちいち目くじらを立てないこと。用務員になって学んだことだ。すっかり板についた愛想笑いを顔に張りつける。

「また虫でも出た？」

「違います」

「じゃあガラス割ったとか？」

「友達が」

まるで楽しんでいるような表情だった。本当の目的をさっさと言えと思うが、泣かれたら嫌だ。しょうがないなあとかいて立ち上がる。

この学校には清掃用具がない。どこから来たのか、オバサンの集団が深夜になると掃除をしに来る。だから生徒が掃除する必要は一切ない。

オバサンの正体は教頭だけが知っているらしい。

そういう経緯で身近にある清掃用具は皆無だ。たびたび新聞を活用してゴミを拾う姿を目撃されているためか、すぐに廃棄しなければならぬものがあるときは呼ばれるようになった。

割れたガラスだとか踏み潰されてしまった哀れな亀虫だとか。自分が生徒たちの内で「新聞屋さん」さんと呼ばれているのも知っている。どこだと訊けば少女は「中庭の花壇の隅」と答えた。

用務員室の窓から見える範囲だ。見れば、それらしき場所に人が集まっていた。教師の姿もある。

「……」

ただガラスが割れたところの騒ぎにしては少し、耳障りだ。振り向くと少女は無表情だった。

「割れたのは三階の窓」

バカみたいに口を開ける俺がツボだったらしい。少女――目紘は笑った。

「救急車、呼ばないんですか？」

かなり変わった小さな女性はあるくまでも冷静だった。思わず手を伸ばすが、目紘は変わらず目だけは嬉しそうにしていた。

「犯人は、おまえか？」

顎を掴む。

「どっちのですか？」

鑑か鏡かと――わかってるくせに訊かれた。

同僚から聞いた。生意気な《彼女たち》は常に騒動の真ん中にいる。

「画数が少ないほうの鏡はどこに行った」

「死にました」

アホらしいくらい正直な回答だった。

少女は訊かれたこと以外は答えない。悪いのは質問が的確でなかったということ。それに尽きる。

つまり、俺が悪い。

「落ちた？ 鏡？ 鑑？」

受話器を持ち上げながら訊く。とりあえず警察に連絡しなければならぬ。

少女は「さあ？」と首をかしげた。わざとらしい。

「落とされたんだと思います。あの子、敵をつくりやすいから」

そのときのいやらしい、ニヤリと笑う目紘を目に焼き付けた。これがこいつの本性だ。

窓が割れた。なぜ？目紘の片割れが落ちたから。

「……くっそ！」

受話器を叩きつける。電話が繋がらない。電気が通ってない。――助けが、呼べない。

「おまえ……何をした……？」

振り向く。目紘は、笑う。いっそう無邪気に。

誰よりも愛らしく。

「校内にいる人間を全て――全滅させます。『あの子』には手始めに死んでもらいました。かわいそう。でも自業自得。――手伝ってくれますよね、駒緒さん」

目紘は――まるでゴキブリでも見るかのような目で俺を見上げていた。この目を、俺は誰よりも知っている。

――思い出した。

「俺は……」

俺は、

息を吸い――

「……はっ」

目の前の殺戮者と同じような顔で笑う。

そして、小さく頷いた。

六年前だ――目紘と出会ったのは。

忘れていたかったのだと思う。こんな化け物から逃げたかった。

「目_二紘……」

目_二紘、鏡。

彼女は約束と寸分違わず、約束通りに俺の前に現れた。

第五章

目紘。

目紘鏡と目紘鑑。

——忘れていた。

目紘の技術は比類がない。前のとき、目紘が俺の身体をいじくりまわしたときから、記憶の捏造は開始されていた。俺が気づかなかっただけ——それこそ、そのとき目紘の負の性格を雰囲気になられて忘れていたから、今の今まで何もかもを忘れていた。

言い訳だ。

「目紘」

俺が呼ぶと、彼女はチツチツチツとふざけて指を振る。

「鑑ちゃん。……今はもう違うけど」

違う。

この目紘は鑑じゃない。この性格はどうやっても記憶の中の鑑とは合致しない。

「優等生だけど、ちょっぴり引っ込み思案な鑑ちゃん。やだやだ。

鑑なんて呼ばないで」

あなたは私だけを見てればいいの。そう言って、目紘は唇を尖らせた。

小さな身体に小さな頭。それから——そのわりに、よく回りすぎる頭脳。全部が全部、鏡の、パーツ。

「今日から私が『鏡』なの。バカだけど人気があった『鏡』ちゃん。私だけの『鏡』。私はそれに成り代わる」

鑑——カガミは笑う。おそらく、戸籍上こいつは『鑑』。死んだのが本物の『鏡』。でも——死んだのは今じゃない。

いや、目の前のこいつと全く同じ体型の身体自体はついさっき死んだ。そういうことじゃない。そういうことじゃあないんだ。

「カガミ——あのときあいつは俺たちを助けた」

《目紘》は、俺たちを助けた。助けた——助けたんだ。それなのにこいつは——鑑は。

「おまえら……姉妹だろ。なのになんで、」

息が詰まる。——息を、止める。

この先を言うのはひどく滑稽だ。

俺は。

それなのに——

なんで。

「なんで、おまえだけ」

おまえだけを。

「どうして今回は俺を——助けてくれないんだ」

年甲斐もなく浮かびそうになった涙を呑み込むと、小さな女性はまた笑ったようだった。小さな小さな女性は、大輪の花のように笑った。

まるで、毒を持った花のように。

「駒緒さんが、好きだからです。泣けない駒緒さんが、大好きだから。だから、『あの子』からあなたを奪いました。恨んでます？」

「いや——」目紘は小首をかしげた。

「ぜんぜん——まったく」

目紘を恨むわけがない。

「そんなことはできない」

「嬉しい！」

途端、ぽああとカガミは目を輝かせて手を叩いて飛び上がる。

「嬉しい！ 嬉しいです、駒緒さん！ 大好き！ 『あの子』より

私を選んでくれるのね。ありがとう駒緒さん！」

明るすぎて逆に寒気がする喜びようから視線を逸らす。こわい——こわいこわいこわいこわいこわい——……。

なんなんだ、こいつ。——目紘。

「目紘——カガミ」

「はい！」

「カガミ」

「はい、駒緒さん」

子犬のような目で微笑みながら俺を見上げる小さい女性。

小さな少女。

小さな――

「――カガミ」

「なんですか？」

目紘は。

目紘は。

カガミは、にっこりと笑う。

「好きです、駒緒さん。愛しています、駒緒さん」

目紘は、笑わない。

「駒緒さん？」

目紘は全然、素直じゃない。

「ねえ」

目紘は――実験体なんかに、媚びない。

「目紘」

「んん？」

「目紘、カガミ」

「はい？」

目紘。

鏡。

おまえじゃないと、駄目なのに。

おまえじゃないと俺はまた、おまえから逃げたくなる。だから――

――コンナヤツ、イラナイ。

「――行くぞ」

俺は、目紘に選ばれた。

「はい！」

目紘鏡が――俺を選んだのに。

「今日から駒緒さんは私のものです」

目紘が。

笑う。

——鏡。

くやしかったら迎えに来い。

俺は。

おまえのために、死なない。

第六章

目紘の細っちい手首を指で挟むように軽く掴んで引っ張っていく。多少痛い目と目紘は生意気に口を歪めて言った。

「駒緒さんは、自分のこと好きですか？」

唐突な質問を無視する。目紘は不満そうに唇を尖らせ、それでもしばらくは大人しくついてきていた。

耐えられなくなったのは校舎を出た頃。

砂埃を散らしながら乾いた運動場を突っ切る。

ここにいたら捕まる。分かりきった展開を、同じ轍^{てっ}を踏むものかと半ば自棄^{やけ}になって歩調を早める。目紘が躓^{つまず}いた。

「駒緒さん、駒緒さん」

「黙って。ついてこい」

もう、目紘を名字にするやつらに振り回されたくない。

焦燥に駆られる俺とは対称的に目紘の心は冷え冷えと凍りゆくようだった。ぐいっと渾身の力で手を引かれる。予期しなかった無言の抗議に思わず振り返る。

「どうした？」

なるべく優しい声を努めたはずがどこか白々しさを残した。楕円に引かれた白線の手前で足を止める。偶然とはいえあまりに計算されつくした演出に歯の奥が軋んだ。

俺にとつての偶然。目紘にとつては計画通り。

——白線。

線引きされた外側と内側。

俺は、自由になりたい。

目紘と一緒に。

「目紘……」

「逃げないで。一緒にいて」
さもないと。

さもないと。

「あの子は帰ってこない」

「……」

《あの子》という相手がわからないほど俺は鈍くない。

目を細めた目紘は「好きですか？」とまた訊いた。

「どっち」

さっきの質問か、《あの子》か。

「ほら」目紘は笑った。「またそうやって、私を避ける」

本当は、目紘になんか触れたくもない。ニセモノの目紘なんか。それを見透かして目紘はそれでもからからと笑う。

「私のこと、好きですか？」

そんなことわかるわけがない。

視線を逸らせば、どこからか視線が刺さる。

目紘じゃない。

目紘は笑うふりをして俺を見ない。

くしゃくしゃの笑顔はそういうことだ。

三階の家庭科室。特別棟の最上階最端部。一番端の窓から、いつものようにあいつが見ていた。

「——そんな顔すんなよ」

気持ち悪い。

目紘の頬に手を伸ばし、麻痺したように痺れる指先をすぐるよう
に追いかけた小さな手が掴む。

——この手が。

鏡を殺した。

「くだらねえ……」

目紘は目紘。目紘は死なない。

主人に死なれた飼い犬は行き場がない。それに思い至らないほど
目紘鏡は非道なやつじゃない。

後始末くらいはするわと不謹慎極まりない言葉を笑って言うだろ
う。

ただどカガミは鏡が死んだと言う。

「今回はのんびりなんだな。あいつら3分以内に来るんじゃないかっ
たっけ」

目紘の弟やら兄貴やら。義理人情を説くシスコンども。

苦い顔を見ると目紘はきょとんとした表情で俺を見つめる。

「3分で来るわけじゃないですか。今頃お父さんが死んでいる
頃ですから。まさかそれを見通さずに私が鏡に手を出したとでも？」

彼らにも世間体がありますからねと言い、俺をぎょっとさせる。

「今度全校全滅なんてしたら怒るよって言われてますから慎重にな
るのも当たり前です。忘れたんですか？ 脳が溶けて腐ってると思
えませんか。あんなこわいお父さんなんて久しぶりで泣くかと思
いました。私だって人の子ですから両親を失望させるのはそれなり
に胸が痛むんです。だから死に際に決行したんですよ。孝行な娘の
心遣いです。死んだ人は容易に文句を言えませんか」

「……そうか」

ええ、とすまして目紘はもっともらしい相槌を打つ。年に似合わ
ない、ませたしぐさだった。

まるで彼女の父親と同じだ。気取ってるところなんか特に。

目紘の父親、目紘キリには2度しか会ったことがないが、頑固な
じいさんだった。子どもは男ばかりで、はじめての娘が生まれたと
きには六十路を越えていた。その娘の手を握って現れた男を何と思
ったのか、「娘に何を吹き込んだのかは知らないが」という言葉で
口火を切り、いかに俺が劣っているかを訥々^{とつとつ}と語ってくれた。

僭越ながら申し上げますが初対面ですよ、お父さん。

妹をたぶらかしやがってと兄貴連中はヤキを入れてくれた。

……何度でも言おう。

初対面ですよ、お兄さん。

「あの手際には惚れ惚れしました。見事なチームプレー。手足を拘
束して爪を剥いで、節足の類が蠢く風呂に浸してからあえて放置。
それから二週間後に腹をかつさばく。並みの精神力では耐えられま

せん」

「俺は虫が好きなんだよ」

「違います。兄を誉めたんです。拷問するほうも疲れるんですよ」

「だから甘受しろって？ 目紬かおまえは」

「目紬ですよ」

知らなかったんですか？ 嘲るように言われた。かわいくねえ……。

未だ白線を前に立ち尽くす俺を追い詰めるようにカガミは言う。

「私は貴方が好きですよ」

「だからなんだよ」

「だから、貴方も私を好きになってください。鏡の代わりなんて嫌です。私だけを見てください」

「見てるじゃねえか」

視線の先には目紬しかいない。当たり前だ。他は全部目紬が殺した。

「おまえしか見えない」

これ以上なにを望んでるんだ。

鏡はいない。誰もいなくなった。俺は見ているだけで——同じように校舎の一角から見続けてきた亡霊と同じように、目紬だけを見ていた。残ったやつはみんな目紬を好きになった。何が不満なんだ。目紬は、俺を虫けらのように扱うのが慣例じゃなかったのか。今更ベタベタするな。俺はツンデレが好きなんだ。

心臓が疼く。

「殴れ、切れ、蹴れ、^{なぶ}蹴れ、打ち据えろ、遠慮なんかするな、罵（^{さげす}ののし）れ、一蔑め、侮蔑しろ、引き裂け、叩き潰せ、刺せ、踏みつけろ、それができないなら目紬じゃない、^{しよせん}所詮にせものだ今更かわいこぶるな、媚びるな、泣くな、諦めるな、頼るな俺はおまえを支えきれない。代わりに、全てをおまえに捧げる。だから弱音を吐くな。情けないやつは嫌いだ。鏡に勝ちたいなら誰よりも偉ぶってりゃいいんだ。あいつはその程度なんだよ」

俺が実験台になった経緯をこの目紬は知らない。だから嘘っぱち

でいい。実際、目紘は尊大でどうしようもないやつだった。あながち嘘じゃない。

俺が言うまでもなく鏡は無意識に実行していた。ただ単に持って生まれた陰湿さと傲慢があっただけだ。他人を虐げることに關しては天才的だった。

あいつの暴力は暴力じゃなかった。内面に反映した暴力。それでは本音を表せなかった。そんな、バカみたいな少女。

対して目紘鑑。

浅くて薄い、殺してやりたいくらい憎たらしい恋敵。

——なんちゃって。そんなことはどうでもいい。差し迫る問題はただ一つ。死活問題到来だ。

「さっき、兄貴たち来ないって言ったよな……」

「来ないとは言ってます。来るのが遅れるだけです。まあ、貴方がのろのろしてたのでいい暇潰しにはなりましたが」

甘々な告白まがいも全て時間潰し。目紘兄が来るまでの余興——殺戮の余韻。

「——くだらねえ」

ふと見た足元は真っ赤に染まっていた。どれが白線だか分かりやしない。

踏み潰した小さな女性たちの死骸。そういえば窓の外に放り投げられた生徒もいたなあと思出す。

流れ出した血の流れに絡み取られそうになる。ぐにぐにぐちゃぐちゃとローファアを血に濡らす運動場。目紘ってほんとに——最悪だ。

パンがナイならお菓子を食えばいいじゃない——世間ずれした感性には恐れ入る。

鏡の言葉が目紘兄——目紘日陰の姿が見えた途端、胸をよぎった。

杏奈がいないなら——《目紘》を頼ればいいと、目紘は思うのね。

杏奈は目紘とは違う。そんなことすらわからないのか。
初対面から最低だった目紘鏡はもう、永遠に俺の前には現れないのかもしれない。

——昏い夜を染めて。

意味不明。俺はそんな言葉が聞きたかったんじゃない。

——目紘。

目紘め。

——杏奈を。

返してくれるって言ったじゃねえか。

弱虫め。

第七章

目紘日陰、目紘哲、目紘花梨、目紘三太、目紘欽也。さあさあお立ち会いつてか。

でかい門をぐり抜け、でかい屋敷に入り、ちんまい玄関に足を踏み入れた途端「カガミちゃん！」とまずダイブして俺を突き飛ばした六男花梨。中学生のくせして妹に貢ぐ生粋のシスコン。突き飛ばしたのはわざとだ。

睨みながら目紘を抱きしめるな変態。見るな。

「……かりんとうが」

「死ねヒモ」

ヒモじゃねえ。

次々にカガミに抱きつくもといへばりつく日陰を除いたテツ、カリン、サンタ、キンヤの4人。出迎えに来てないだけでまだ他にもいる。そら恐ろしい話だ。どうやら名前で元素をコンプリートするつもりらしい。

鉄、リン、酸素、金。……酸素と酸は違うか。

遷移元素と典型元素。可哀想に日陰。存在感ゼロだ。

目紘を溺愛するだめだめ兄貴どもは、本当は自分たちが迎えに行きたかったと鑑に頬擦りしながら言い訳を繰り返す。それ見ながら俺の首根っこは既に日陰に掴まれていた。

ザッツ、連行。

目紘家の歩くたびにカツンカツンうるさい廊下をずると引きずられていく。

ああ、鑑が遠い。

にやにやする横つ面をメイドに蹴られ、通り抜けざまに家政夫に肩を蹴られた。もういやだこんな家。だから来たくなかった。鼻がへし曲がったじゃねえかド素人。もっと綺麗に折りやがれ。

ひくひく動く指先を握りこむと日陰が振り返った。

「ははっ」

すぐに前を向く。笑いやがったこんちきしょう。キャラが違うぞ。設定はどうした。心優しいお兄様が台無しだ。

「4年もあれば変わるさ。いくら『石頭ハゲ頭』でもね」

前に俺が捨て台詞に吐いた言葉を繰り返し、薄く笑う。スマートな秘書ってかんじの外見とガキ大将みたいな内面が見事に噛み合っていない。あの一言が人生を狂わせたらしい。ごめんな、三男。まさか同級生の何気ない一言がここまで根強く残るとは予想外だ。

「その……」

申し訳なさそうに見上げれば勝ち誇ったように鼻で笑われた。「ふさふさの髪は地毛か？」

一歩気になっていたことを訊いてみた。吹っ飛ぶ右手。

さよなら右手。そのうち会おうな。

蹴り飛ばしたのはさっきのメイドだ。

「性格ブスは嫌われるぞ」

「どっちが」

「怒るなよ美優。真実に怒られても知らねーからな」

「真実は風邪で寝てます。残念」

「トーキーがこんなに喋りゃあ、日陰の性格が破綻するのも納得だな」

年月ってこわい。

歯を食いしばって美優はしばらくおれを睨みつけていたが、その間にも日陰が引っ張っていくので段々遠ざかる。

アディオス、若野美優。

グッバイトーキー。

そりゃもう長い廊下を無言で目絃兄は引きずっていく。そういやこいつ前回の折檻に参加してなかったなあと思い出す。ある意味カミより頻繁に連絡を取っているかもしれない。4年越しだけど。

「なあシヨタ」

「……」

「なあなあ日陰くん」

「……」

「なあなあなあ美優の彼氏」

「婚約者だ」

おおっと。日陰は努めて無表情にひらひら手を振って指輪を見せびらかす。お熱いこって。にやけると拳が飛んできそうだったので黙っておいた。

「駒緒」

先に口を開いたのは日陰だった。

「行くな」

「メロドラ？」

「まだ死んでない」

「誰が？」

「あー……キリさん？」

日陰は頷く。

天を仰ぐ。

「ひでーなあ。仮にも父親だろ」

「違う」

「……ん？」

「あんなの父親じゃない」

日陰は俺を睨む。

「許せて？」

「……許せよ」

見返すと日陰は舌打ちする。

「おまえのことならもういい。許してる」
そうじゃない。

「もともと俺のせい。キリさんは関係ない」
恨むのは筋違いだ。俺と鏡が悪い。

「殺したのはあいつだ」

「違う違う、鏡」

全校全滅。鏡の得意技。

「仕向けたのはあいつじゃなか」

「ここに押し込んだのは俺だろ」

どうあっても引く気のない友人をじっと無言で見つめる。目を逸らされた。

「おれ、ここにいたくない」

「そんなこと言うなって」

「おまえ全然約束守らねーし」

「まあまあ。忙しいのよ俺も」

「みんな待ってる」

「モテるなー俺」

「駒緒」日陰の足が止まった。「みんな、待ってる」

「6年？」

「6年」

張りつめた雰囲気、皮膚がぴりぴりする。

笑いかけるとますます不機嫌になる。

「このままじゃ、おまえ死ぬぞ」

「死なねえって。見ろこの右手。美しき脚線美。痛みもなくスパッと切れてすぐに再生、まあお得。安いよ安いよーってな」

「おまえの手は足なのか」

ため息をついた日陰を笑う。

「まー見てな。俺の素晴らしき演技でキリさんをがつーんと一発ーってエ！」

いつのまに近づいたのか、マスクをつけた女が俺の腹を蹴り飛ばした。

こんなんばかり。

今度は誰だともんずと蹴った足を捕まえて引き倒す。相手は予想外にあっさりと尻餅をついた。

「……真実さんじゃないっすか」

お久しぶりとひきつって笑うと頬を平手打ちされた。

「いってーなあ……」

「さっき『痛みもなく』って言った」

非難でも追及でもなく。

ただの言葉にぐっと詰まる。だからこの女苦手だ。どこから聞いていやがった。

スレンダーな体型にいかにも間の抜けたパジャマ姿でサンダルを突っ掛けている。尻餅ついた拍子にサンダルが片方飛んだ。

「痛いだろ。ざまあみろ」

傍観していた日陰は憎々しげに吐き捨てる。へたりこんだ野代真実はうろんげに「うそつき」と捨て置いて俺の頭を小突いて立ち上がった。

ぺたぺたと大理石の廊下を歩いてサンダルに足を通す。

振り返り、マスクを取る。唇がひび割れて所々血が固まっている。

「眠い、寒い、熱い」

俺のせいじゃない。

「寝ろよ病人」

「水風呂に入った」

「は？」

「題して《顔だけ水風呂》。何回も何回も入って出て入って出て」

「バカじゃん」

「頭を押さえられて、髪の毛引っ張られて、《顔だけ水風呂》。けっこう辛いね」

「誰だ」

低く訊けば、真実は口の端だけでふっと笑う。

「ケイくん。目紘^{ケイ}（マミダ）一螢。あいつよく殴んの」
「言えよ」

もっと早くに。おもつくそ俺のせいじゃねえか。

「記憶喪失がよく言うよ。最後に会ったの何年前だっけ。6年前？

4年前？ 3年前？ 子どもが成長するには充分な時間だよ」

おせーんだよと真実は毒づいた。

「きっちり怒られてこい」

長袖のパジャマの腕をまくり上げるとあざだらけだった。

赤、青、黄色。信号みたく新旧入り交じったそれに手を伸ばす。

「ごめん」

「気にすんな。恨んでる」

そう言い残してふらふらと真実は立ち去る。俺の王子様は相変わらず颯爽とカッコ良い。恨み言を言うためだけに寝室を脱け出してきたらしい。気づいた美優が慌てて駆け寄る。

「忘れてた分の代償は大きいってことですよ、駒緒さん」

ふらっと現れた鑑はすれ違いざまに真実を見つめ、俺を見てにっこり笑った。

「わたしは待ちくたびれて迎えにいきましたけどね」

「来んな」

「地の果てまで追いかけます。駒緒さんが鏡を忘れられなくても、わたしは駒緒さんが好きなんです」

「俺は嫌いだ。近寄るな。悪霊退散」

「まだ生きてます。勝手に殺さないでください。日陰さんも、駒緒なんかのわがままに付き合わないで。いい迷惑です」

呼び捨てすんな。

「はい」

おまえも頷くな。

睨んでも鑑は飄々とそれを受け流し、俺に手を差し出した。

「お父さんに知られてしまったみたいです。久しぶりに雷が落ちます」

笑う鑑の手を掴むのと同時に反動で引き倒してやった。

「だっせ」

「『鏡に言いつけるから!』——とでも言えればいいんですか?」

酷薄な微笑を浮かべ、いたぶるような目付きで俺を見上げるカガミ。倒錯的な感覚に視界が歪む。

「行きましょう、駒緒さん。そして、死んでください。裏切る下僕

なんかいりません。恩知らずな人ですね」

立ち尽くす俺と座り込む目紘。

耳元で囁かれた気がした。

「貴方が死ななければ、鏡は戻ってきません。わかるでしょう。杏奈も鏡も——わたしじゃありません、本当は、」

日陰がその先を止めようと鑑に手を伸ばす。

一瞬、遅かった。

「貴方が殺した」

第八章

正直、正面切って言われると言葉に詰まるものがある。

——どのくらい本気で、うちの娘を愛してる？

詰問するでもなく、本当に疑問で不思議でしようがないという素朴すぎる問いには、万感の愛が詰まってはち切れそうだったことを今ならわかる。

不器用な父親、愛情表現が苦手だった目紘キリ。愛し方がわからなかった目紘家の家長。

たった、抱きしめてやればよかったと気づけなかった人。

娘を傷つけるやつは許さない。可能性がほんの少しでもあるならその娘が愛した人間でも容赦なし。

俺は、その、偉大なる目紘キリの娘を二人もたぶらかし、そのうち一人を不幸にした重罪人であるからして、ここで会ったが百年目無事で帰れるわけがない。

ましてや今、カガミ嬢のご機嫌を損ねてしまったわけでした。

「日陰、いざとなったら俺を守ってくれ」

傍らに立つ目紘家三男にすがってみた。

すげなく振り払われた。ひどい。

「アホか」

キリさんの出迎える準備ができるまで廊下で待つ間。つかの間の親愛タイムだ。

久闊を叙すべく開いた腕をちらりと見て日陰は鼻で笑う。

「不死身の友だち助けておれにメリットない」

「そこをなんとか」

「美優に怒られるから嫌だ。自分で何とかしろ。おれは恋人円満でいたい」

「おまえの基準はそこなのか、友情はどこへ消えた大気圏か七つの海か。俺はどうやってそれを見つけりゃいいんだ、どうやって目紘

さんちから逃げればいい」

「聞くな。おれも自由じゃないよ。目紘の一員だしな」

「それ以前に友だちだってことを忘れるな薄情者。一緒に風呂に入った裸の仲だ。ああ、あと一緒に山に行って駆け回った仲間。いつだっけ、あのとき許可がいるって知らなくて見つかって怒られたよな。あのおやしすっげー怒ってて泣いて謝ったら『ケガなかっただけよかった』って山程たけのこくれて人間ってあったけーって思ったよ俺は。『子どもだけで山に入って危ないだろ!』って。おまえはその温かみの一欠片でもちぎって煎じて吞めばいい。モテるぞ。俺が惚れ直す、実践しろ」

「惚れてたのかよ」

「その人柄に」

「そりゃどーも」

「いえいえお構いなく」

嬉しくないけどねと日陰がひとりごちる。友だち甲斐のないやつだ。どうも昔のことを根にもってやがる。

「粘着質な男は嫌われるぞ」

「おまえに言われたかねーし」

「俺はたんぱく質な男だ。くーるびゅーていー」

「唾液で分解されるんだな、理解した」

「すまんそれはちよっと嫌だ」

たんぱく質を名乗るなんておこがましい。俺としたことがとんだうっかりさんだ。

「ひれ伏すから許してくれ」

「やめろ。床がよごれる」

「……………」

「って、キリさんなら言う」

「……ああ、だよな、びっくりした」

日陰にあるまじき発言だ。

びっくりしたっていうより思考停止。

本当じゃなさそうな日陰の様子に回り始めた脳が必死に理性を保とうと頑張る。

えらい、俺の脳みそ。

叫びてえ。

やっぱしタイムラグが長すぎた。ちよつと——手遅れだ。ひくつく口の端をむりやり引き上げる。

友情は大切だ。

中身が昔のままじゃなくても……外見も変わって男前でむかつくけど、そんなことで友だちやーめたなんて言う俺じゃない。一抜け禁止、始まったからには最後まで巻き込まれてやらねーと過去の俺に失礼だ。

ゴートウネクスト。

手に握ったドアノブを握りしめる。

傍らにカガミはいない。先にキリさんに会いに行った。どうせ『駒緒にいじわるされたの』とでもチクってるんだろう、わかってる、ちよつと調子に乗った、立場をわきまえてなかった。

ここは目紘家だ。生かすも殺すも目紘次第。俺は世界一のバカだ。いくら目紘鑑がキリさんの8番目だったとしても大事な箱入り娘だ。つてことを忘れてた。失態。自分反省。

いや、うん、カガミがあんまりにもアレだから俺も大人げなかったよ。

ごめんなさい、謝ろう。謝るのは大切だ。時に自分が悪くなくても謝る。それがトラブル回避の賢い処世術。

人生回避可能なケンカに突っ込むほど無益なことはない。その選択が賢いか賢くないかは本音を吐露するとただのチキン行為だが俺は気にしない。小市民の知恵を駆使しないでどうする。先祖代々わが行寺家は賢く、俺はチキンに生きてきた。小心者で何が悪い。野心溢れて成功するやつなんか一握りだ。その一握りに俺なんかが入るわけがない。野菜ゾーンにニッパーが並んでるような気分だ。場違い、場違い、場違い。三つ拍子を唱えたらば手を振りつつさよう

なら。俺は俺を必要としてくれるところに行く。

「……おい」

使命感に燃えた俺を引き止めたのはやっぱり日陰だった。

ひじをがちりホールド。そのまま足を後ろに払われ、あえなく床と仲良しこよし。こいつら人をなんだと思ってるんだ、生きてるもの皆ブラザーって聞いたことねえのかよ寡聞もの。

「痛いです日陰さん」

「敬語気持ち悪い。やめろ。校長にタメ口きいてたやつソレほど気味悪いもんじゃない」

「知らなかったんだよ」

「年上に対して敬語を使わない時点で終わってる」

「俺9月生まれ、おまえ2月。日陰は俺に敬意」

「払わない。同年はタメ。タメ口のタメは同年の意味。ゆえに上下関係なし」

ズルッズルッと爪を床に立てて腹這いのまま逃げを打つ俺の首根っこを日陰はぐいっと引っ張る。

同時にベルト。

あんぱんのヒーロー並みの地面と平行な飛行具合。俺は市民の安全チェックためにパトロールに出かけるような好青年じゃない、ばい菌とも戦いたくない平和主義者なんだ。ていうかあんなデカイばい菌に勝てるようなテクを持ち合わせてない。頭はあいにくパンじやない。しわっしわの脳みそだ。鏡にどつかれてつるつるに近いかもしれないがそれでも愛すべき生物の知と本能が詰まった器官であるからして！

日陰は俺を危なっかしく立たせる。まあ、見るからに筋肉ないから致し方ない。想像できた。

もしかしたら目紘のやつらはみんなダイエットをしてるのかもしれない。その細腕で鏡なんかは俺をどつき回したのだからどうかしてる。筋肉つける、筋肉。きつとそのうち折れる。

「いやいやいや、鏡を見てみろ足蹴にしてせせら笑う小学生なんか

俺は認めない。たとえ十七年間小学2年生やってたとしても実は同い年だっていってもあいつは確実に俺を下に見てた」

そうだ、足蹴にもされた。

あのときのことを俺は忘れていない。

暮れ泥む夕暮れ時に浮き出た小さな魔物。

ランドセルを背負っていた、真っ赤な唇で声を発する、影が蜘蛛の形をしていた。

——あなたは……。

目紘は笑う。

酷薄に白い歯を小さな唇からちらりと覗かせ目を細めて

『私は——』

笑う目紘。

気持ち悪い。

「不老の目紘家だからな。火燃えたる山、不死の葉捨てり。其れを拾いし葉屋、名を魔壬^{まみだ}拿といふ」

「微妙に古っちく言ってるけどたぶん使用法ちがうぞ」

古文なめんな。炉端大学国文科卒を目の前になんたる誤用、なんたる侮辱。専攻は近代文学だったけど。

それにしたってそれなりにかじってた。近代知りたくば古文に遡れ。また違った趣がある。知識が広まれば広まるほど味が出てくるんだ近代文学は。

まあそれは途中で断念した俺が語ることじゃないから専門の方々
に任せるとして、言いたいことはこれだけ。

「不老と不死は違う」

老いず、死なず。老いないことは死なないことじゃない。死なないことは老いないことじゃない。年をとらない代わりに死にやすい。

死なない代わりに急速に年老いる。

世の中は平等だ。何かの代わりに何かを得る。プライム0になるようになつてゐる。

気づかないだけ。気づけないだけ。

人間は鈍感だ。

不幸に敏感——他人の不幸は蜜の味。

憎い相手ならなおさら狂喜乱舞するような鈍感さは罪だ。最低だ。

他人はどうかは知らないが俺は嫌いだ。

——どうして人を殺しちゃいけないの？

——自分が殺されたくないから。

——それを守って、殺されない保証がどこにあるのかしら。

——……知らねえよ。

自分がされたくないから他人にもしない。

当たり前だ。それが正常、なにも間違つてない。

不幸になったとき、笑われたくないから自分も笑わない。

相手の気持ちを第一に。

「細かいことごちゃごちゃ言うな鬱陶しい」

はみ出すのはごく一部。それが良い選択にしろ悪い選択にしろ、俺には関係ないので放置。そこで怒れるほど俺は良い人間じゃない。

だから怒りませんよ気にしてませんとも。危機感なんて持つてない。焦つてない。逃避もしない。俺は向き合う。

「おまえ変わったな」

性格、表情、目付き、姿形。山岸陽太は2年しか耐えられなかった。

爛漫、揚々、薄暗いものとは程遠いものだと思つてた。

「……もう……なんか……」

次男とそっくりじゃねえか。

「だから、人間って変わるんだってば」

しかたなさそうに日陰が言う。少しだけ悲しそうな顔が透けて見えた。それもすぐに消える。

――拐かされた人間はどこにも行けない。

――人間だったのか。

――変化は早ければ早いほどつまらないわ。遅すぎるのもダメ。ほどよく観察日記が書ける速度を私は切望しているの。

――話誤魔化してないか？

日陰は粘った。

あいつに言わせりゃ『早すぎる』になるんだろうが。

「……キリさんは？ 死にそうって聞いたけど」

「……ああ。刺されたくらいじゃどうってことない。血管切れたってしばらく不機嫌だったけど、半年ぶりに鑑が帰ってきたから」

「ご機嫌ですか」

「ご機嫌ですね」

「俺がいることは？」

「不愉快、さっさと帰れって」

「よっしゃ、言質とった帰」

「だめです」

どん、と目の前のドアが開く。

カガミがいた。

「駒緒さんはいてくれないと困ります」

いらないのは日陰さんです。カガミは睨みつける。

「さっさと消えてください」

「はい」

すみやかに引く目紘日陰。

……こいつと二人っきりにしないでくれ。

手を引かれる。

「行きましよう、駒緒さん。お父さんは貴方に会いたくもないそうですが私がふぬけた貴方を見てもらいたいので会ってください。存分に叱責されて泣けばいいんです」

「炉端校じゃ泣き方を教えてくれなかった。こりゃ困ったな」

「たわ言なんかいりません。とにかく来てください。忙しいなか時間を割いてく

れるんですからね」

「もう引退しただろ」

「最近学校経営に乗り出したらしいです。小学校を建てるみたいですよ」

「……誰かさんが壊すからな」

小さな命、立派な命。

目糺なんか嫌いだ。

救いようがないバカ。

「おまえはバカだ」

「ニセモノの学校にはニセモノしかいません。大したことじゃないんですよ、心は痛みません」

平然と言えるのは、どれだけ大切か知らないから。

——おねがい。

「……会うのやだな——」

——駒緒。

——私のこと、忘れないで。

「ギリさんこえー」

絶対ミンチだ。

第九章

部屋に入るとすぐに目に入っただのは針の山だった。
足元に先が上を向いて一面に敷き詰められている。

「……………」

「来なさい、駒緒」

入り口のほんの狭い針なし部分に立つ。

その低い声をたどると針山越しに目紘キリがいる。ちゃんとした机と椅子があるくせにその前の床にあぐらをかいて初老の男がこっちを睨みつけていた。

そこを中心にして針はない。

「来なさい」

針よりも鋭く、酷薄な視線に思わずぐっと詰まる。
前に出そうとした足は動けない。

——さっき『痛みもなく』って言った。

当たり前だ。当たり前のことを言わせないでほしい。

殴られたら痛い。

蹴られたら痛い。

冷たい熱い苦しい全部、痛い。わかってる。

歯を食いしばれば済む。

たとえ力を入れすぎて奥歯が砕けても用意ができなくて舌を噛んで血の味が口一杯に広がっても。

すぐに治る。

俺はだから、先に進める。

「キリさん……」

痛いのは嫌だ。

「早くしなさい。きみは棒立ちでいることしかできないんですか。それとも僕が怖いんですか」

「……怖いですよ。すごく」

当たり前だ。怖くないわけがない。

「でもそれよりも、」

これを見逃すなんてキリさんらしくない。

「これじゃ鑑が渡れない。足の裏がずたずたになります」

カガミなんか大嫌いだ。ただ、そのくらいの気遣いは人として当然。いくら憎くても鏡と同じ顔で同じ声で苦しむ姿は見たくない。

キリは少し眉をひそめ、小バカにしたように片頬で笑う。しわだらけの、日焼けした精悍な顔がそんな表情をするのはあまり好きじゃなかった。似合わない。

「それは、うちの娘が大事だからなのか、それともただ単にきみがフェミニストなのかはつきりしてほしい。それ次第で僕はきみを殴らなきゃいけないから」

「鑑が好きだから」

間髪入れず答える。背後に立ったカガミが体を強張らせる気配がした。

「好きです。そうじゃなきゃこんなやつ氣にもしない」

嘘だ。

「ところでキリさん、お久しぶりです。ご挨拶が遅くなって申し訳ありません。迷子になってました。この家広いんでとてもじゃないけど造りが把握できないんです。作り替えたらどうですか？　そろそろ大きくする頃合いでしょう。コドモも増えてきたようですし、まあ俺が口出しするようなことじゃないと思いますがいいと思いますよ。この際だから鑑の部屋もつくってやったらいいかがです？　いつまでもあなたと同じ部屋で寝起きじゃ親離れできないと思います。子離れもいつかはしなきゃならないことですしね。早ければいいってもんでもないんでしょうしそれぞれ家庭で決めることですから別にあと二十年くらい一緒の部屋にいたって俺はいいと思いますけど、あんまり近すぎても見えなくなるものってあるらしいですから。あ、どうせなら俺の部屋も造ってくださいよ」

笑う。

「いや、冗談ですよ、そんなに睨まないでください怖いんですよ。同じ屋根の下になんていたくない。今日はご挨拶だけ。ご挨拶だけですホントに。すぐ出ていきますよこんなところ。またあんなところに連れてかれたらたまりません、泣くかと思いました」

嘘。

「おまえが泣くわけない。二十四年間ずっと泣かなかった」

「いや、さすがの俺もおぎゃあと産まれた子ですけど……」

「泣いてない。涙を見たことがない」

「……あんたストーカーですか。俺だってころんだら泣きましたよ」

「うそつけ」

うそじゃない。

「俺は——」

「駒緒」

カガミの声がした。

振り返らない。

「進みなさい」

もう一度、カガミが言う。

だだをこねる子どもに言い聞かせるように辛抱強く言葉を句切る。

「い、き、な、さ、い」

「……あのな、話の途中だからちよっと」

手を、引かれた。

「黙ってろって」

小刻みに震える手にそっと小さな手が触れる——離れる。

「言い訳なんか聞きたくありません。貴方は向こう側に行ける。わたしは行けない。だったら貴方がすべきことは一つです」

わたしを抱えて進みなさい。カガミは平然と言い放つ。

「——簡単でしょう？」

簡単に言うな。

「わたしのためなんて台詞は陳腐すぎます。わたしは貴方に愛され

たいとは思ってますがそんな、道具のように使われるのは真っ平御免です。わたし個人を尊重してください。貴方を優先させるなんて馬鹿馬鹿しい。勘違いしないでください。貴方は観察対象でしかありません」

その言い草に思わずゴクツと息をのむ。

観察対象――そりゃ、そうだ。生ぬるい関係なんかじゃない。ペツトには名前をつける。

商品になる動物には名前なんかない。《行寺駒緒》は親がつけた名前だ。食用牛の子に牛の親が名前をつけても飼育する人間には分かりやしない。

それと同じ。目紘は番号で俺を監理する。

あきればてた溜息を背中で聞く。

「わかりきったことを言わせないでください。世話が焼けますね、貴方それでも大人ですか」

「たしかに二十歳になったとき『まだ早い』って思ったな。まだまだ子ども」

「茶化さないでください。わたしはさっき何と言いましたか？」

今日の姫様は一段と機嫌が良いらしい。

「おまえをだっこして向こうに行け。いや、おまえ軽いからできないことはないんだけど」

できないことはないんだけど。

これを聞かなきゃ始まらない。

「おまえどうやってこっちに来たんだ？」

振り返る。

無表情がそこにあった。少し辟易したような呆れ顔。

針越しに父親と喋るなんてこと普通はありえない。ましてや溺愛する娘を前にキリさんがやるわけがない。キリさんが率先して痛い思いをすることは万一にもない。

「馬鹿ですね。来る前に言ったでしょう、『死んでる頃』って。日陰さんも『刺された』って言いましたよ。貴方、少し浮かれ気味な

んじゃないですか？ そんなに旧友に会えたのが嬉しかったんですか。楽しそうでしたもんね。でもそれでも聞き逃すなんてらしくありません。はっきりちゃんと理解しなさい。わたしが、やったんです」

「……なにを？」

「刺したんです。登校前に一刺し。だからお互いに近寄りたくても周りがやあやあうるさい。親子の仲を割くなんてひどい人たちです」困ったわとでも言いたげにカガミは嘆息する。

刺した。

カガミがキリを。

そんな冗談。

「そんなことはどうでもいいです。早く行きなさい。わたしはあいつを消さなければならぬんです」

あいつ。

父親をそんなふうと呼ぶカガミを、俺は知らない。知らない。

どっちがうそつきかわからない。

——逃げないで。

杏奈が叫ぶ。

——コマ、わたしから逃げないで。

さあ——

見捨てたのは、どっちだ。

「きみは」

割り込むようにキリが口を開く。真っ直ぐに見据えて言う。

「カガミを愛してると言うなら、すべきことはわかるだろう。それともまた嘘をついたのかな。約束を反故にしたことまだ僕は鮮明に覚えているんだけどきみはすっかり忘れたみたいだね。鑑に影響されたのかな、それとも鏡かな。どっちでもいいけど一度きみは僕の娘を不幸にした。ずたずたにして捨てたんだ。きみは彼女の信賴に応えなかった。どうしてそのくらいのことができない？ きみはそこまで無能だったのか？」

その言葉が深く刺さる。

よりによってキリさんなんかに。

「きみは傷つかない。娘を守るだけのものを持っていた。僕なんかに責められるなんてきみは最低だ」

カガミが視界の端で身動きする。

「家族を省みない。暴力をふるう。そんなことをしてきた父親に言われるくらいきみは墮落している。僕は後悔して改心しているけどきみはどうなんだろうね。娘を任せたのは間違이었다。失敗した。僕じゃどうしようもないから何とかできるっていうきみに任せたのにとんだ見込み違いだ。死んでしまえ」

不意にきゅっと手を掴まれた。動かない頭の中が一瞬弛緩する。傾きかけた体が引き止められる。

カガミは何も言わず、さらに握る力を強くする。

「コマ」

緊張し続けた体中がようやく血を巡らし始める。キリに声をかけられたときから固まったままだった全身にカガミが息を吹き込む。

震え続けていた口をゆっくり意識して閉じる。

無益に開閉するだけだった唇に感覚を感じる。

そっと、ため息を吐いた。

「略すな。それあいつにしか呼ばれたくない」

「そうですか。それは失礼しました」

カガミは平然としていた。

わかってるんだろう。どんな意味を持つのかくらい。

優しかったり冷たかったり。無邪気な冷酷さは無知からくる。カガミは人の感情に鈍感すぎる。

少し考えれば想像に至るだけの能があるのに、実感しない。

鈍く、気づきたくないことから目を逸らし続けた人間の成れの果て。

そのくせ、ぎりぎりで気づく。

「駒緒」

前方から催促の声がかかる。

わかってますよ。

「そっちには行きますけど、鑑は連れていきません。それから、キリさんもとくにわかっているでしょうけど、そのことについて話があります。まだ俺には話が見えてません。ちよつとは親切に説明してください。俺をここに連れてきたのはそっちの都合でしょう」

カガミは父親を刺した時点で勘当されていてもおかしくない。もしかしたらカガミはもうキリさんの口からそれを告げられているかもしれない。

だったらなおさらだ。家から追い出されたカガミが俺にくつついてこないとも限らない。一人暮らしが同居になるといろいろ勝手が違う。

……いや、一緒に住む気なんてさらさらないんだけども。

だいたい二十四の独り身男にいきなり小学生の同居人ができたらご近所に何事かと思われる。よくて娘、穿つと幼女誘拐。変な噂が立ったら居心地が悪い。安住妨害だ。

そしたら隣の隣の家の見知らぬ斜向かいの住人が「イツカヤルト思ッテタシデスヨ」と加工した声で言う様子が全国に放映されるんだきつと。俺は無実だ。守備範囲は同年代から熟女まで。今までの友人諸君なら証言してくれるだろう。

問題は全員あの世かここにいるから取材なんかできないってことだ。

目紘の抜け穴。それに気づいたあの人が画面上に出てくれることを祈る、西村先生。

「いいだろう」

キリは満足そうに頷いた。俺が鑑を抱き抱えるのはさぞ気に入らないだろう。それこそ「帰れ」と蹴り飛ばされる。

それに、キリとしても秘密の話をしたらしい。この人もまあまあツンデレだ。

「じゃ……」

両者望む答えを出したところでスラックスの裾を折る。一旦カガミの意見は無視だ。

針の高さは三センチ。ちょうど足を貫通する。

針の先に血の玉が一瞬溜まって甲に落ちる。

「い——っ」

もれそうになった呻きをのみ込む。前からキリが、後ろからカガミが興味津々に観察している。ここで声を上げるわけにはいかない。歯を食いしばる。

足を上げるたびにこすれるような音が耳にへばりつく。

——ああ。

なにやってんだろ。

飛ばばよかったんだと気づいたのは四メートルのそれを渡りきった後。呻きそうになるのを堪え、あくまでにこやかにキリの前に立つ。

「ふん」

つまらなそうに鼻を鳴らされた。

座れと尊大にあごをしゃくる。

そして俺が腰を下ろしたのを確認して、カガミに「外で待つてなさい」と言う。カガミは不服そうな顔をしたが言うとおりに出ていった。

向き直ったキリは洗面をつくっていかにも気に入らないというアピールをする。

「二人つきりだ」

「そうっすね」

だからなんだ。劇も進路相談もしないぞ俺は。

「娘の話をしよう。カガミのことだ」

「俺はそれより、俺がいなかった間のあいつらの待遇について聞きたいんですけど。目紘蚩って何ですか」

「息子だ」

そんなことは知ってる。

「ていうか陽太のままでいいじゃないですか、なんだよ日陰ってつきり元素でコンプするつもりなのかと思ってました。仲間はズレ可哀想です」

なめらかになった舌がキリを相手にキリキリマイ。

「ベリリウムなんて噛みそうで嫌だ」

「誰もベリリウムにしろなんて言ってます」

俯瞰しつつある感覚を徐々に感じていく。

「外から来た子も僕の子もみんな平等だ」

「真実のケガは」

「蚩は特殊で手がつけられない」

訊きたいことはそれじゃない。

「美優はメイドには向いてないと思います」

「きみの親友は家政夫に向いてないね」

「じゃあ執事にしますか」

「際限なく喋り続ける執事なんていらない。ていうか邪魔うるさい、さすがきみの親友、うっとうしい」

「性格は正反対ですよ。あいつは破天荒を絵に描いたようなやつです。俺はおとなしめ。子羊メーメーです」

「きみ日本語習ったことある？」

「二十四年間日本語漬けです。毎日おはようからおやすみまで喋り倒してます」

「サルからやり直してきなさい」

「サルは人語を話しません」

「僕はきみよりサルのほうが好きなんだ」

「俺はキリさんよりウサギのほうが好きですよ」

「僕とウサギは同義だ」

「そういう嘘は四月一日前後にお願いします」

キリに可愛さを求めるほうが間違ってる。

——純100%のウサギ。たまに咬まれるのも後ろ足で蹴られるのも冷たい態度をとられるのも苦じゃない。もしかしたら俺とウサギは運命の赤い糸で繋がってるのかもしれない。

赤い糸で繋がった二人。ロマンチックで思わず幸せなれそうな言葉だ。

しかし唯一繋がってほしい杏奈とは運命を感じない。愛を感じない。振り向いてほしくて16年。ウサギに恋する5秒前。

俺は一途な男だ。女たらしにはなれないしなりたくない。今のところ行寺駒緒はウサギにうつつを抜かしている暇はない。

愛しの杏奈。浮気なんかしたら死海で素潜りしろと宣う驚異の強者。だから好きです杏奈さん。もっと束縛してください。

「僕はきみに一つ訊きたいことがある。《あの子》に会ったかい？」
「会いましたよ。つい最近」

つい、最近。

会いたくもないシチュエーションで。

そもそも会いたいシチュエーションなんかない。関わりを持ちたくない。

キリは薄く笑って見透かしたような猫なで声を出す。

「ならいいんだ。どうもきみに会いたくてストーカーしてたみたいだから。——悪趣味だね。もし会えてないようだったら手助けするはめになるところだったよ。面倒が省けてよかった。万々歳だ」

後半は本音だった。自然な仕草で俺の額を手の甲で張り飛ばす。

直前に気づいて目を見開いたまま、上半身だけ後ろに倒れる。肩をそのまま打ちつけ喉の奥が一瞬で収縮する。歯を食いしばるとギ

リ……と軋む音がした。

床が衝撃に呻く。キリは愉快そうにげらげら笑った。

「まだ関わりがあったなんてとんだ恥知らずもいたもんだ。《あの子》は何も言わないだろう。文句も何も言わない。きみだけを許し続ける。あんな、可愛げも何もない子がきみなんかになつくななんて腹立たしくて仕方がない。僕の娘なのに」

結局はそこだ。思い通りにならないから気に入らない。暴君の言い分だ。人のせいにしないでほしい。

「……会ったっていつでも話はしませんでした」

会いたくなかったし。避け続けたツケがきた。

「当然だよ。余計なことはしないでいい。ただ《あの子》が満足できたなら充分だ。現に何も手出しはしなかったんだろ？　なら、それが正解だ」

たぶん幻滅したから離れていったんだろう。機嫌の悪いときは決まって半日は口をきいてくれなかった。

まあ狙ったけど。

「僕はね、《あの子》にひどいことをした。そのための償いとしてきみを提供したんだ——制限付きでね。期待に沿う働きをしてくれなきゃ困る」

「俺はあんたの持ち物じゃないんですけど」

「いいや、僕のだ。わかってるだろう。きみはここから離れられない。必ず帰ってくる」

いや、僕じゃなくて《目紘》のかなとキリは嘯く。

嫌すぎる事実だ。

手について起き上がる。これだから思い込みの激しいやつは嫌いだ。

《目紘》がそんなに偉いのかよ——とかいう青臭い台詞は言いたくない。偉いとかすごいとかそういう段階の問答なら学生時代に区切りをつけた。

《目紘》は最低だ。あらゆる面で劣りすぎていて始末に終えない。

殺しを推奨する親にしてあの子どもあり。たとえ三男以降は全てキリの実の子じゃないにしても、何千何万から選ばれたわけだ。最低じゃないはずがない。

――葉屋、名を魔壬^{まみだ}拿といふ。

本当に、そうだったら世界は平等になる。
突然変異でもない。《目紘》は《目紘》。いつかは消えて埋^{うず}もれる誰か。哀れで可哀想な寄せ集め。

――だって、一人って寂しいじゃない。

「鏡はあなたの娘で幸せだったと思いますか？」
地雷を踏んだ音がした。

「少なくともきみの隣にいるよりは気が楽だったんじゃないのか。
鏡はよく笑っていた」

「……そうですか」

そうですね。

気づかないなら、それはそれで、俺のせいじゃない。

「俺からも一つ質問です。杏奈はどこですか？ 返してくれるって約束だったでしょう」

「知らないよ。鏡に聞けばいい。もつとも、いないけどね」

「俺は鏡を通してあなたと約束したんです。2年待ちました。いいかげん返してください。それとも何ですか、杏奈が死んだとでも都合のいいこと言うつもりですか？ その手には乗りません。何を隠しているのか知りませんが、杏奈は返してもらいます」

「無理を言わないでくれ。杏奈の居場所は鏡しか知らない。あの娘に聞きなさい」

「訊いても答えねーからあんたに聞いてんだよ。日陰なんか撒こうと思えば撒けたんだ。カガミなんか見捨てられた。俺は杏奈に会い

たくてこんな——」

……会いたくて？

「胸くそ悪いところに来たんだ！」

——なにをそんなに焦ってる……？

弾みをつけた言葉は自分の足につまづいて転ぶ。

「俺はッ！」

「駒緒らしくないね」

キリはそんな俺を見下して心底つまらなそうにため息を吐いた。

「そんなきみは見たくない。いつでも飄々と後腐れなく生きてきたじゃないか。未練なんて見苦しい。もういいじゃないか、きみは。

僕らの行く先にきみの未来はない。嫌なんだよ。つきまとわれると殺したくなる。鏡がきみを傷つけたら許さないって言うから懇切丁寧にきみの周りの人間をつまみ出してあげたのにまたあんな確木しかもく女子校なんかに行つて。危ないからやめなつて僕はちゃんと忠告しただろう。疋椰子々（ひきやしご）、炉端、確木、目紘の4つは《あの子》が管理してるんだから、潰されないわけがない。全国から集めた生徒に正常な子は一人としていない仕組みだったんだ。きみだけは正常だから異質だった。全然、改善してくれようとしなかった。だから卒業したら自由だったんだ。唯一自由を与えられた不名誉な生徒なんだからもうちょっと申し訳なさそうに生きてくれ。胸くそ悪いのはこっちの言い分だ」

キリは無表情で全ての動きを止めさせる。

母校を消された。就職先でも目紘がいた。何年も前に母校と姉妹校だったあの学校の場所には工場が立っている。

杏奈がいない。ツンデレのツンしか持ち合わせてなくて笑うのも泣くのも不器用で、寂しがり屋で曲がったことが大嫌いで異性が苦手でファンクラブの存在にも気づかない、たまにボケる彼女を俺は目紘に許した。

諦めたことなんてなかったのに。

あいつが全部だったのに、鏡が持っていた。

——だって、一人って寂しいじゃない。

そんな理由で、持っていかれた。

おもちゃを欲しがるガキ。欲しくなったら際限がなくなって、なまじ簡単に手に入るものだから次々と手をつけてはすぐに目移りする。たまにお気に入りが見つかって肌身離さず持ち歩く。

手離したおもちゃが蠢くのを「気持ち悪い」と言いながらほくそ笑む。優越感で頬を丸く肥やすように微笑む。そんな、目紘鏡。

安っぽく着飾る、お人形遊び。高貴なる鏡様はその細腕でどうにかなる人形が大好きでたまらない。

いいかげん飽きればいいのに。

本当はもう、楽しくないだろう。

……。

「第一印象は——辛気くさいガキです。みんなが笑ってるのに笑わないし勝手になついて学校にまで来て離れないから西村には怒られるし杏奈には冷たくてやたら辛く当たる。それで怒ると泣くから周りに怒られて散々でした」

恥を忍んだルンデレラも鏡の前では下らない寸劇。子どもだましかと早々に見切られた。

世間は冷たい。もうちょっと温かくてもきつと誰も怒らない。不格好でも、多少生きにくい方法でも、本音で笑うほうが楽しいに決まってる。

愛想笑いが苦しいならやめればいい。鏡はそれが一番巧かった。

世界はたまに平等なのに気づかないことが多い。

「結局きみは誰が好きなんだ？」

キリの呆れたようなその言葉に安堵する。

それだ。

「目紘——」

目紘家長女。

俺が本当は大好きでしかたがないやつ。

やっと出番が来た。

目紘。

カガミでもなく、鑑でもなく、鏡でもなく。

目紘家、長女。

行方不明の彼女。

「俺が好きなのは一人だけです」

口に出すには少しだけ勇気がいる。

もちろん。

当たり前だ。

「杏奈」

自然と唇が緩む。

「目紘杏奈ですよ——当たり前じゃないですか。婚約までしたんですから」

俺は幸せで、何かを見落とした。あのとき意識の外に取りこぼした。

殺したのは、俺だ。

死んだ人間は生き返らない。願っても祈っても償っても。科学的に無理な話だ。

大抵の無理を押し通す俺の《鏡》。

《鏡》は左右対称に写し出す。右手は左に。左手は右に。

それなのに上と下は変えられない。天か地か、その両極端は。

カガミでも鑑でも鏡でも不可能だ。シンメトリーに並んだ俺と目紘。それは、同等だったからできたことだ。そのうちいつか終わりが来る。

俺が均衡を保てなくなった。背負いすぎた罪から逃げた。

消したのは鏡じゃなくて俺自身だった。

「鑑は邪魔でした」

鏡が大好き、鑑ちゃん。

鏡はハエを見るような目で鑑を見ていた。

——ダメーなんて不要よ。私は一人でいい。

そう言って譲らなかった鏡が唯一認めた人間は杏奈だけだった。

——こんなに好きなのに！

それだけで手に入るなら、誰も苦しまない。胸を焦がすことなく他人を得ることができるだろう。

それでいいならどうぞ、いくらでも言えればいい。こんなに好きなのにこんなに好きなのにこんなに好きなのにこんなに好きなのにこんなに好きなのに。

一生言い続けて、言い終わったとき飽きてなかったら本物だ。

俺は言わない。本物でも偽物でも、言うことにだけ意味がある。

同じ自己満足でも俺はこっちを選んだ。

逃げるほうを選んだ。

それが——《目紜》に対する裏切り。

「杏奈はいない」

キリはため息混じりに言う。駄々っ子を宥めるように静かに諭す。

「諦めなさい。こんなこと言いたくないけどね……アレは失敗だった。忘れなさい。きみが選ばれたんだ。杏奈よりきみが。鏡の御眼鏡にかなったということだろう。あの子ほどワガママな子はないんだ。頑固で言うことなんかきいてくれない。それは鑑も同じだ。鏡と同じものを欲しがる。あの子たちの欲には際限がない」

鏡が持っているから欲しがるのか、欲しいものが全く同一なのか。選んだのが鏡なら、どうしてカガミが存在するのか。

どうしてあいつがそんなことをする。考えろ。よく考えて思考しろ。

答えはどこだ。

「——何で、俺を呼んだんですか？ カガミじゃないでしょう、呼

び出しに關しては。カガミはこの家に俺が入るのを嫌います。理由もありません。あなたの指示ですよね。『必ず帰ってくる』なんて白々しい。帰ってくるように仕向けたんじゃないですか。わざわざ日陰を迎えに行かせて……裏があるって言ってるようなものです。カガミにも言っただけでなかったみたいですが、日陰を見たときのあいつの顔すごかったですよ。齒ざしりしてましたからね」

「日陰はすぐあの子の味方につくから先に手回しておいたんだ。今朝刺されてからすぐにね。鑑はきみと高飛びする気で、きみは僕らから逃げたくて必死だったっていうのにきみは一人で勝手に焦ってた。悠然と俊由を待ち構えてた鑑の唯一の逃走経路を絶ってあげたのは爽快だったね。年々ずる賢くなってくよあの娘は。まったくどうしようもない」

あたかも最初から計画通りだと繕う姿が面白かったとキリは笑う。

「あの子は見かけにこだわる。格好を気にするからね、他人に狼狽えた姿なんか見せられないさ」

ましてやきみに、とキリが言う。

「俺はあいつがカッコ悪いやつだってこと知ってますよ」

「だけど積極的に見せたいものでもないだろう。偉ぶるのが生き甲斐だ」

「実力があるだけ最低ですね」

本当に偉いやつは見栄を張らない。偉いやつは黙ってても偉い。

キリは心底楽しそうに言う。「今日、きみを呼び出したのは」
嫌な予感がある。

「鏡が――」

――景色が、暗転する。

第九章（後書き）

もっと頑張ります。

第十章 1

嘘をついてないんだと何回言えば分るんだろう。好きな気持ちは変わらないのに、互いの距離だけが離れていく。

君が泣いているとき、抱きしめればいいのか、一緒に泣けばいいのか、僕にはわからない。どうしたらいい？

どうしたら君の気持に追いつけるんだろう。わからない。わからないけど、これだけは言える。僕は今も昔も変わらず、きみを愛してる。

追いついたと思った時にはもう、手遅れだった。きみはもう僕の知っている君ではなくなっていて———それどころか君は、あの男の手を握って僕の前に現れた。

愛しい僕の娘。そんなやつを選んだら、君は壊れてしまう。それなのに、君はそれでもいいと言う。いつからこんなことになったんだろう。僕のことを好きでも嫌いでもいい。僕らは家族だから。好きなどころも嫌いなところもある。好きすぎてどうしようもないなんてことはないけれど、なんとなく目を離したくない。嫌いなどころもたくさんある。殺してやりたいとまでは思ったことないけれど、愛が憎しみに変わるなんてこともないけれど、僕はそれでも彼女の許せないところはいつまでも許せないままだし、娘である彼女にしたらそれは同じことだろう。

親と子ども。そんな関係だって、愛情にはいろんな形があるから、ただ単に僕らがそういう淡泊な関係なのかもしれない。

僕は娘に対する接し方がわからないし、わかる気もしない。苦手だ。子どもも家族も、一緒にいて安心する相手じゃない。ましてや赤の他人になんか本心は見せられない。

本当は一人がよかった。

彼女の話しよう。僕の娘は何物にも興味を示さなかった。おもちゃなんかには目もむけなかったし、僕が持っていたゲームはことごとく冷めた目で見られた。いいじゃないか、それは誰が禁止するものでもない。外でも遊ばない、家の中でも無表情。どれだけたくさんものを見せても一瞥するだけで手も出さない。

それが彼女の本当だと思っていた。僕はそれでもよかった。この子の幸せは僕が知らないだけできつとどこかにあるんだろう。

その思い込みは間違えたまま続いた。彼女が興味を持ったのは一つだけ。

行寺駒緒。

彼だけが彼女の世界を確かにした。彼女が仮面を被っていたわけじゃない。彼女はいつでも本音で一生懸命生きていた。

僕はそれを、認めることができなかった。

そいつに初めて会ったのはルンデレラの練習に燃えた一年のときだった。

駒緒行寺と改名された次の日――6月1日。

その日は学生にあるまじく一時間目から六時間目まで爆睡し、起きたら教室には誰もいなかった。

窓の外は雨。

世紀末の豪雨だとはしゃぎまくった親友は朝からうるさかった。

高校生になって友だちと待ち合わせて登校なんて恥ずかしすぎる。

「こーまおくん！ あそびましょー」

朝から鬼ごっこに誘うバカは毎朝毎朝、俺がどれだけ早く起きても出かける支度ができた頃にチャイムが鳴らす。

もう諦めた。おとなしく観念して一緒に出かける。それしかないだろう。こいつのしつこさといったら瞬間接着剤並みだ。離れるってことを知らない。

別にバカップルのごとくベタベタくっついてるわけじゃないが、タイミングが合えば大抵一緒にいる。男同士でそれはどうなのとたまに言われるが、そんなに不快じゃない。変態の隣もそこそこ面白い。

「認めたくないものだ……自分の……若さゆえの過ちと言うものを」

「頼むからやめてくれ」

あまりに名言過ぎる名言を呟く親友が怖くてしかたがない。断じてこいつと過ちなんで犯したくない目紘家にお婿にいけなくなる。

……それも嫌だ。

ぎゃーぎゃー騒ぎつつ学校に着き、いつものように席に座った。

以後爆睡。

起きたら身体中にに大量の付箋紙が貼られていた。

『起きろ』

『昨日の夜、駒緒は……』

『笹口先生が呼んでました』

『大人の階段を登った駒緒に愛の手を』

『ランナーズハイ』

大半は下ネタだった。この付箋紙をタイムカプセルに入れたら「認めたくないものだ……自分の……若さゆえの過ちというものを」の気持ちになるだろう。入れたるか、こいつら。

下ネタにまみれた全身で、額に貼られた一枚を握りしめて目的地に急ぐ。すれ違う生徒たちが付箋紙をバラバラ落としながら走る俺を不審者でも見るような目で見てくる。恥ずかしさ、これに極まったりだ。散乱したポストイットを片す誰かに幸あれ。

二階の渡り廊下を走りきり、三階に向かう階段をかけ上がる。

三階は二年生のテリトリーだ。今日はちょうど遠足の日らしく、人っこ一人いない。高校生にもなって遠足があるなんて思いもしなかった。人生のほとんどを共に過ごした仲間と今さら遠足なんてしても大して意味がない。学校は何を考えてるんだろう。

とかなんとか学年一の秀才が息巻いてたが予定地が遊園地だと言った途端おとなしくなった。素直でいいやつだ。

廊下には明かりがついていない。四階は三年生のクラスがあるから階段付近には煌々と明かりが灯っているが、それ以外は薄暗い。速足で二年三組の前を通り抜ける。教室は一組から八組まで。用があるのはその向こうの保健室だ。

「――」

「は？」

声が聞こえた。

振り返る。

誰もいない。

「こっちですよ」

目の前で声が笑う。

――小さな少女がいた。

細い、小枝みたいな手足。

不釣り合いなランドセル。

薄く笑ったその女――鏡が笑う。

「こんにちは、駒緒さん。はじめまして駒緒さん。こんなところで会うなんて奇遇ですね。そんなに急いでどこに行くんです？」

「……」

森の熊さんと遭遇した子もこんな気持ちだったのだろうか。もしくは赤ずきんちゃん。

なんだこいつ。

「まあ駒緒さんがどこに行くのかは把握済みです。手に取るようにわかります。内容が内容ですからね、急ぎたい気持ちはわかります。ですが私の話を少し聞いてくれませんか？ 後悔はさせません」

「俺はおまえに出会ったことを後悔してるんだが」

「面白いことを言いますね。抱腹絶倒で立ち上がれません。さては私を笑い殺す気ですね？」

「その年で妄想癖があると苦勞するぞ」

抱腹どころかむしろ胸を張ってるように見えるのは幻覚だろうか。さつき姿が見えなかったのはこいつが小さすぎたせいらしい。前ばかり見てたから手前が見えてなかった。目線を下げると彼女はにっこり笑う。

「目紘鏡と申します」

「……行寺駒緒」

「知ってます。姉のことが大好きだそうで、どうもありがとうございます」

「どういたしまして」

何でお礼を言われてんだろう。こんなに嬉しくない礼は生まれて初めてだ。

「今日は父の遣いで来ました。あの人、娘のことになると異様に心が狭いんですよ。あんまり怒らせないであげてください。見ていてあまりに哀れです。天下の目紘キリが娘一人恋したってだけで取り乱すなんて有り得ないことです。不気味にもほどがあります」

「杏奈は俺を恋愛対象として見てない。濡れ衣だ」

「嘘ですね」

鏡はなぜか心底悲しそうに言う。

「いい機会だから訊いておきましょう。逃げないでくださいね。――どうして杏奈に拘るんですか？ 理由なんかないはずですよ。あの子はあなたの好みではありませんよね。綺麗なだけの女なんか、あなたが必要としていない」

「……………」

「私は杏奈が嫌いです。だから、あなたも嫌いなはずですよ。おかしい。矛盾だらけ。あなたはもっと、私に近くていいはずなのに――私とあなたは決定的に違う」

「……何の話をしているのかわからないけど、とりあえず退いてくんね？」

こんなのにハマってる暇はない。はやく――

「父は杏奈を溺愛しています。あなた、このままじゃ殺されますよ？ 最低でも杏奈と一緒にいられなくなります。会うことも声を聞くことも叶わなくなる。父は本気で――」

「……だから？」

「だから、諦めてください。無駄なことはしたくないんです。今ならまだ何もしません」

「俺は相手にもされてないんだってば。無罪だ」

「男嫌いの杏奈があなたとだけ話すんです。それだけで重罪です」

「いや、山岸とだって……」

開きかけた口を制される。

「それ、本気で言ってます？」

「俺は――」

「あの人はもう手遅れです」

睨み合う。

「あなたは誰よりも目紘のことを知っているはずですよ。絶対、逃げられませんよ」

「そんなのわかんねえじゃねーか」

「わかりますよ。嘘なんてつきたくないのと言いますが、あの子を本家に戻すことが決まりました。これだけはあなたに言うなと言われてました。私はあなたに隠し事はしたくありません」

「――鏡」

「また拐かされてしまいましたね、駒緒さん」
鏡が笑う。

俺はそれを嘘だと知ってる。

この女——嘘つきだ。

「駒緒さん。私と、取り引きしましょう」
悪魔が笑った。

第十章 1（後書き）

お分かりの通り、ランナーズハイはエロくないです。

「悪魔が笑った」と書きましたが、「実は目紘は悪魔なんだ!」
とかいう展開にはなりません。

第十章 2

「私と取り引きしましょう」

その言葉すら、嘘だとは思う。《白い嘘》だとか世の中には色付きの嘘があるらしいが、そんなカラーバリエーションはいらない。嘘に色も何もない。

その嘘で誰が傷ついて泣いて失望するのか。それが重要だ。言い訳みたいになっても、それはきみのためについた《白い嘘》だから」なんて言われて「はい、そうですね」なんて言える人は天下一品のお人好しか、よっぽど人間が出来てるやつだけだ。俺は天地がひっくり返ってもいい人にはなれないし人としては最低だ。

「それはきみのためについた嘘なんだよ」なんて言われたら「うるせえバカ」としか言いようがない。

人によっては取っておいたケーキを「食べきれないと思ったから食べておいたよ」と言われたようなものだ。

それか「きみの宿題やっておいたよ」みたいな。「……ありがとう」としか言えねえ。筆跡が違うから怒られるのは俺だけだな。

余計なお世話だ。俺の役割をとらないでほしい。なんでもかんでも先回りして、気づいた頃に「やっておいたからさ」なんて言われなくても嬉しくない。迷惑だ。

「嘘じゃありませんよ。嘘をつくのは最低です。――ですが、つかなければ幸せを掴めないときだってあるんです。それを、わからない、嘘つきは嫌いなんていう言葉で切り捨てるのはどうかと思いますよ。貴方はそれで自分が正義を貫いたつもりでいるのかもしれない。自分が、見過ごすことが自分や相手への優しさです。自分に優しくなれない人は見ている周りが辛いんです。貴方はそれをわかっていない」

「俺は誰か大切な人のために嘘を吐こうなんて思わないし、ましてや自分のための嘘なんて笑い話もいいとこだ。だいたい、俺おまえ

のことよく知らねえしガキと取り引きするほど落ちぶれてない。さつさと帰ってメシ食って寝ろ。ついでに杏奈は死んでも渡さん」

「あの子は元はといえば私のものです」

「違う。おまえがあいつのものなんだ」

勘違いするな。杏奈のほうが圧倒的に立場は上だ。

鏡は不気味に笑う。

「それはどうでしょうね。あなたは知らないでしょう。私たちは日々変化します、人間と同様に。立場も性格も刻々と生々しいくらいの速度で全てを変えていきます。あなたが目紘家を離れてから幾年経ちましたか？ 杏奈をあなたが連れ去ってから、何もしなかったと思いますか？ 侵食は始まってますよ、駒緒さん。計画の前倒しです。予定なんていくらでも変更できるんです。この学校にいる限り、あなたも杏奈も私たちからは逃げられません。あなたは既に私たちの手のひらの上で生きる人形です」

「成り上がりがよく言う」

「成り上がりだからこそ、実力で這い上がってきた自負があります。私は諦めませんよ。私のために私は全力投球するんです。別の誰かのためになんか動きません」

目の前の少女は不遜な態度で堂々と言う。その姿はあまりに滑稽で、自信に満ちていた。揺るがないものの上に立つ勝者の表情。年に合わないそれだった。

「――で、取り引きの内容ってのは？」

つい聞いてしまった。

「杏奈を諦めてください。その代わり、私はあなたを幸せにします」

「俺の幸せはおまえにはわからない」

「元に戻ることに違いますか？ あなたは昔に戻りたいんじゃないんですか？ 何も知らなかったあの頃、まだ、《鏡》の存在を知らなかった頃。ひとつ良いことを教えてあげましょう、駒緒さん。――本物の鏡は一人だけです。他はすべてニセモノです。騙されちゃ駄目ですよ。父は基本的に嘘つきです。何を吹き込まれたのかはそ

の場にいなかった私にはわかりませんが、その話の八割は嘘です」

「二割は本当じゃねえか」

それだけで充分だ。

「駒緒さんは甘いですね。父は揶揄んでますよ。あなたを馬鹿にしています。そんなふうにされて悔しくないんですか？」

「いや、悔しくねーし、やる気出させよーみたいなわけわかんないノリで話されてもな」

「やる気を出してください。あなたはもっと頑張れるはずです。できないわけがありません。私はあなたの本気が見たいんです」

「おまえに見せる義理はない」

年下にそんなこと言われたくない。なんかもうグダグダだ。緊張感も何もない。

舞台設定は完璧なのに何だこの台無し具合。目紘が絡むとボロッボロだ。こんなやつに構ってられねえ。

隣をすり抜けた俺の背中に、鏡と名乗る少女は声をかける。

「ところで杏奈が怪我したそうですね」

「聞こえない聞こえない聞こえない」

「行かないほうがいいですよ。怪我したのって顔らしいですから」

「だからなんだよ」

思わず振り返る。鏡はその場に立ち尽くしていた。

「鈍い人ですね。鼻血ですよ、鼻血。鼻に綿を詰めただけでも恥ずかしいのに他人に見られるなんて私なら恥ずかしくて恥ずかしくて羞恥心で清水の舞台から――」

走っていった保健室のドアを開け放つ。

「杏奈！ 鼻血ブーしたって!？」

消毒液のボトルが顔を直撃した。

第十章 3 (前書き)

甘々ゾーン

第十章 3

人の感情はいつどこで変わるかわからない。好悪はいくらでも変えられる。「好き」も「嫌い」も信じたくない。大抵裏返る。

悪口なんて気にしない。流されない。俺は自分の意思で生きる。それができないなら、いつか誰かのお荷物になるだけだ。

「杏奈」

自分でさえも辟易するくらいの気分屋なのに、彼女に対する気持ちは今のところ変わらない。呼ぶたび、振り向いてくれるたび、胸のどこかが疼く。嬉しくてたまらない。それだけでいい。何も望まない。

本当は彼氏になんかならなくていい。傍にいただけで精一杯、どうしようもなく幸せだ。

恥ずかしいから絶対に言わないけど、その程度で満足だ。

「今日、鏡に会った」

杏奈がめちゃくちゃ不機嫌そうな顔で振り向いた。

「どこで？」

「さっき。その廊下で」

「何で？」

辟易とした表情をしていた。正面に座ると眉間のしわが深くなる。「何しに来たの？」

ベッドに腰かけた彼女は問い詰める。

俺か、鏡か。問われてるのはどっちだ。

「教えて。あの子が来たってことは何かあるでしょ」

「ない。俺がシスコンになる確率並みにない」

「もうなってるじゃん」

「だから『ない』ってこと」

もう行き着いてる。始める始めないの議論の前に完成してる。「おまえ嘘ついてただろ」

「……………」

「だーまーるーなー」

「……鏡が来たの？」

「いや、あれはたぶんカガミ。代行」

名乗ったからって本物とは限らない。うそつきばかりだ。俺はまだ「鏡」を知らないけれど、あそこまで性格は悪くないだろう。なんたって杏奈の妹だ。かわいくないわけがない。

保健室の先生が眉間にしわを寄せながら電話をしている。さっき生徒が2人、病院に運ばれた。

「そうね、あの子にしては少なすぎる」

杏奈は声をひそめ、窓の外を見つめる。校庭で騒ぐ生徒に混じる《本物》を見つけようとしているように見えた。

「それで、どうしたそれ」

指差すと鼻を押さえる。

「ぶつけた」

「どこで？」

「階段」

「階段？」

杏奈はむすつとして黙りこむ。これだから好きな子を追い詰めることはやめられない。

俺は大概ひねくれてるから他人の言う「好き」を信じることはできないけど、自分の言ったことには責任を持つ。

「6年後の今日」

「うん？」

聞こうとしてくれないなら、聞かせてやるまでだ。

「おまえに結婚を申し込む。それまでの6年間、俺と付き合ってください」

彼氏にならなくてもいいとは思うけど、俺だって人間だ。欲をいえばうなぎのぼりに挙がる。本当に欲しいもの以上のものがもらえるなら遠慮も謙遜もしたくない。

俺の場合はもらえるかどうかはわからないけど。手汗やばい。

「――駒緒」

「はい」

少しの沈黙の後に無表情で杏奈がまっすぐに俺を見る。

「今までそれ冗談だと思ってた。駒緒はノリで適当なこと言うから」

「いやこれは本気で――」

「私のはあんまり冗談とか言えない性格だから、本当のことだけ言うね」

腹になまりを押し込まれたのかと思った。

杏奈のこういう笑顔が好きだ。

「好きです。幸せにしてください。幸せにしてくれた分の倍、私は駒緒を幸せにする」

「……それは俺の台詞だ」

なんだこの甘酸っぱい状況。心臓がうるさい。

こんな展開、俺の人生にあっていいはずがない。

「いい？」

杏奈が手を伸ばす。俺の手を握る。杏奈が顔を真っ赤に染めて微笑む。

――ああ。

「ありがとう」

正直に言おう――本当は。

これが欲しかった。

第十章 4

言わなきゃ駄目だと思った。今言わなきゃ、杏奈は取られる。

杏奈を残し、保健室から出る。予想したとおり、まだそこにいた。

「駒緒さん」

鏡が二人。片方はマネキンのように動かない。

「さっそく取引しましょうか、駒緒さん。この子から話は聞いたと思うから今日はちゃんと本音を言います。本当は私、杏奈よりあなたが欲しいんです」

今日は本音大会か。

「俺はどうすればいい」

「選べばいいだけです。私に服従するか、《カガミ》になるか、あの子たちみたいになるか」

動かないほうの鏡を見る。楽しそうに話す鏡とそっくりそのままの姿形をしている。これで双子じゃないってんだから血は水より濃い。

「あの子たちってアレ？」

さっき杏奈が見ていた校庭を指す。鏡は頷いた。

なら俺は、せめて偽物にならない道を選ぶ。

「条件をつけていいか？」

「何なりと」

余裕の笑みで鏡は答える。

「俺のクラスメイトは優遇しろ。この高校はそれ以外徹底的に潰せ、手伝えってんなら手伝う」

「心配しなくてもやる予定でした」

生意気なガキが俺を指差す。「あなたは私のものです。それをお忘れなく。選択の余地があるだけ幸せに思ってください」

けたけたけたと二人の鏡が笑う。不気味で異様だった。
「また迎えに来ます」

これが。

俺と鏡の出会いだった。

第十章 4（後書き）

第十章 おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564k/>

疑殆帯同

2011年9月18日03時17分発行